海外協力の現場から

タイ編

青年海外協力隊員の記録

昭和59年10月

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局

JICA LIBRARY
1017524[8]

国際協力事業団	
受入月日 '84.12.18	122
	36
登録No. 10940	JVP

序にかえて

昭和59年10月　　青年海外協力隊事務局長　野村忠策

青年海外協力隊が発足して19年を経た。昭和40年末から41年初にかけて1次隊の隊員48名がフィリピン，マレイシア，カンボディア，ラオスの4カ国へ派遣されて以来，今日までに約5,200余名の隊員が33の開発途上国へ派遣された。協力隊創設にかかわりをもった者のひとりとして，今昔の感にたえない。

同時に，このような協力隊の発展を見るにつけ，私は，受入各国で高い評価を培ってきた隊員および，本事業の意義を理解して協力隊を育てることに地道な努力を注いでこられた政府，政界および都道府県の方がた，青少年運動指導者をはじめ広範な関係者各位に対して深甚なる敬意と感謝の意を表したい。

さて，協力隊事務局では昭和54年度から，隊員が事務局へ提出した業務報告書を国別にとりまとめ，『海外協力の現場から』と題して報告書集の刊行を始めた。幸い，各界から「協力隊員の生々しい活動と生活状況に触れて感動をおぼえる」との好評をいただいたので，本年度もタイ，ソロモンの2カ国編を刊行することとした。

いうまでもなく，協力隊員の活動は，開発途上諸国の国づくり，人づくりに“草の根”で協力しようとする我が国の青年のボランティア活動である。日本とは全く異なる文化，環境の中で，そこに住む人びとと共に暮らし，共に働くことには種々の“壁”があり，時には挫折感にとらわれる。報告書は，その壁を乗り越えて新しい協力の手法を生み出そうと日夜努力している隊員の哀歓に満ちた貴重な体験の記録である。協力隊事業の財産であると同時に，我が国，我が国民全体の財産でもある。

私は協力隊の仕事は隊員受入国にとってはもちろん，我が国の将来にとっても素晴らしい事業であると確信している。今後の協力隊の飛躍的発展のためには国民各位の御理解，御支援が不可欠である。一層，御理解を深めていただくうえで，この報告書集が活用されれば幸甚である。末筆ながら，報告書集作成に御協力願った関係職種の技術専門委員の方がた，ならびに隊員（ＯＢ）諸君に謝意を表する次第である。

タ　イ　編

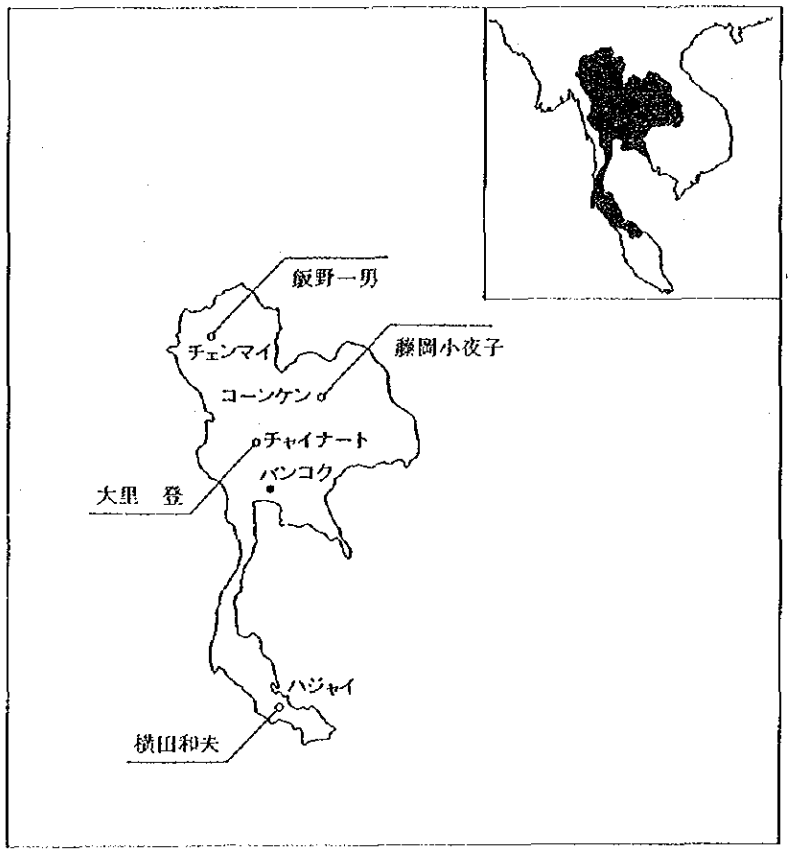
目　　次

序にかえて ……野村　忠策…(1)
◎タイ任国事情 ……(5)
◎コーンケン大学での日本語教育 ……藤岡小夜子…(15)
帰国して思うこと ……藤岡小夜子…(33)
藤岡隊員の報告書を読んで ……佐久間勝彦…(35)
◎職業訓練学校からの報告 ……横田　和夫…(39)
横田隊員の報告書を読んで ……向井　政昭…(55)
◎技術職業教育大学での斡旋指導 ……飯野　一男…(59)
飯野隊員の報告書を読んで ……三上　博…(74)
◎農地改良事務所における農協活動 ……大里　登…(77)
あとがき ……(93)
〔付〕タイと協力隊 ……(2)
タイの略図と概要 ……(3)

タイと協力隊（昭和59年9月1日現在）

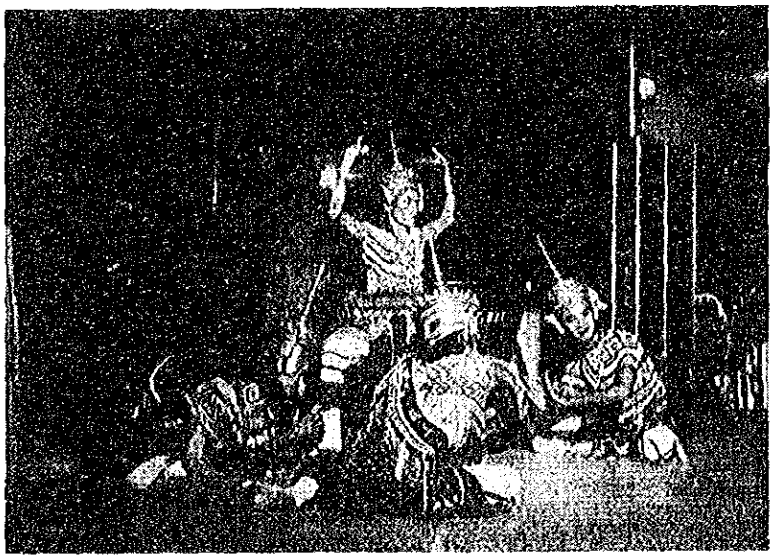
最初の隊員派遣：昭和56年7月								
職種部門	農林水産	加工	保守操作	土木建築	保健衛生	教育文化	スポーツ	合計
派遣中	7 (0)	4 (0)	9 (0)	0 (0)	4 (2)	7 (6)	3 (0)	34 (8)
実績（累計）	8 (0)	4 (0)	10 (0)	0 (0)	4 (2)	9 (8)	3 (0)	38 (10)

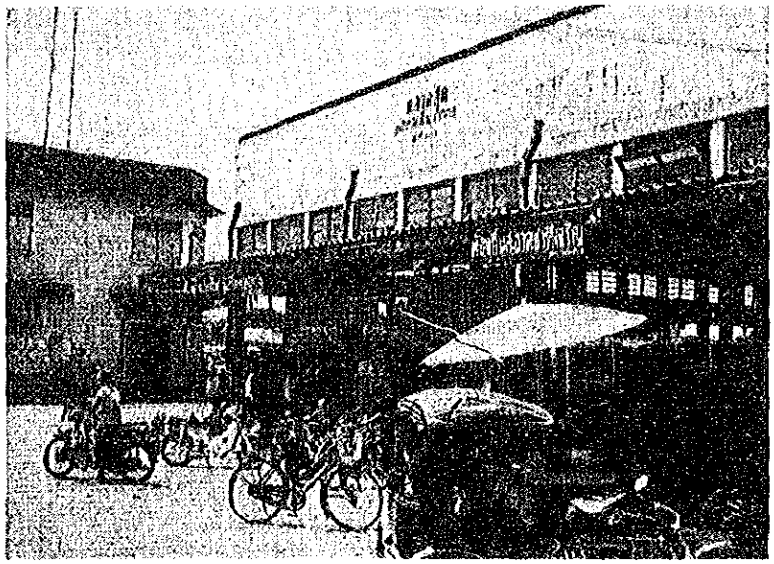
(注) カッコ内は女性隊員。



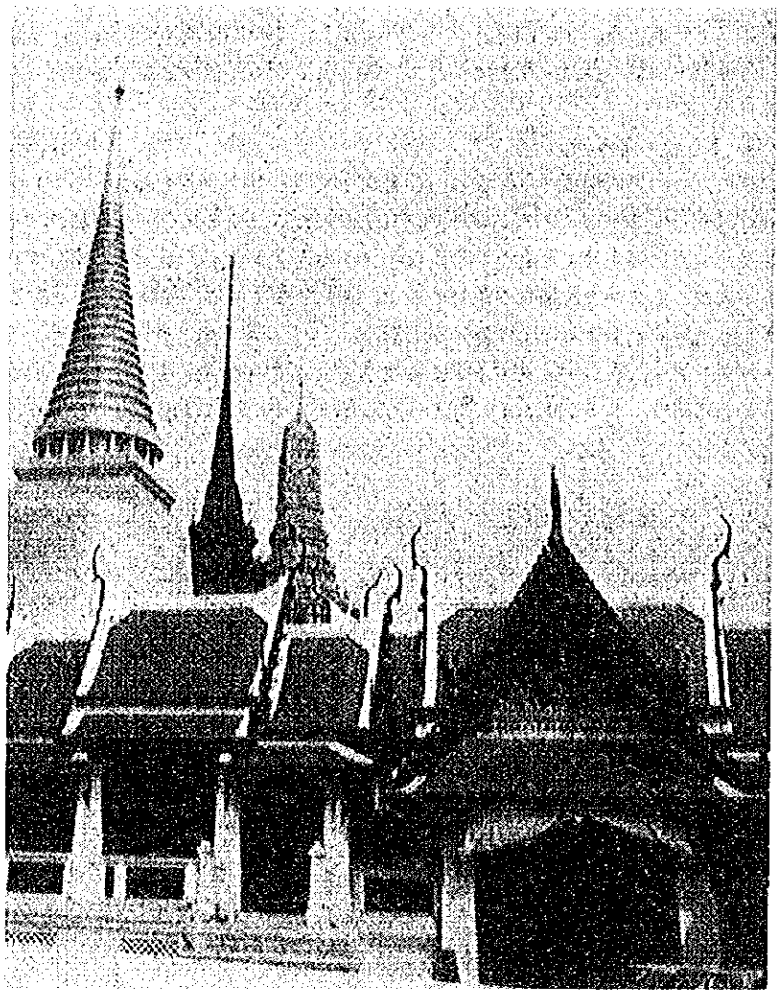
タ イ 概 要

面　積：51万4,000㎢
人　口：4,787万5,002人（1981年）
宗　教：仏教徒約94％，イスラム教徒約4％，その他約2％
公用語：タイ語
1人当たりの国民所得：16,312バーツ（1981年）
通　貨：バーツ（1バーツは約10円）
首　都：バンコク
政　体：立憲君主国
元　首：プーミポン・アドゥンヤデート国王





タイ任国事情



1. クルンテープの道で見たもの

（※クルンテープとはバンコクの名称で，タイ人はバンコクよりクルンテープを好み，外国人に対してのみバンコクと言う）

1982年10月5日，現地時間4時25分に，私達はクルンテープの空港ドングムアンクに着いた。1週間クルンテープで過し，その間に路上で出合った騒音と怪こう，熱気と臭気，花や布切れや新聞を売り歩く子供達の事を書きたいと思う。

① トゥク・トゥク

クルンテープの街をけたたましい音をたてて走るのは，バイクやバスやトラック，そしてこのトゥク・トゥクだ。気楽に乗れる三輪タクシーなのだが，バリバリと音を響かせて走るところから，タイの人はトゥク・トゥクと呼んでいる。大変うるさい上に振動が激しいので，運転手の中には，難聴や白ろう病にかかっている人もいるのではないかと思う。

エンジンは，どのトゥク・トゥクも年季が入っている。信号待ちなどで止まっている時は，「トントントン」という音をたてて，時には止まってしまう。

市場の風景

走り出すと「バリバリバリ」になる。

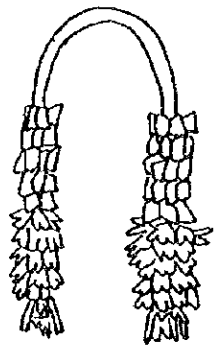
運転手が前に座わり，後ろにお客が3人程乗れる。ハンドルはバイクと同じで，アクセルも同じようにグリップを回す。料金は必ず乗る前に交渉しないと，高額を請求される。お客は背を丸め，車内に頭を入れて運転手と交渉するのだが，見ていると，お客も運転手もじっくりと時間をかけてやっている。

私も交渉してみた。運転手は，「そりゃー安すぎるよ，今ガソリン代が高いからね。やっぱり40バーツだね（約400円）」と切り返してくる。ニコニコしながら言うので，殺気はまったくない。私までつられてニコニコしながら，「そりゃ高すぎるよ，直線道路だから25バーツ（約250円）」と言う。かなり安い値段を言っても，運転手は立ち去らずに交渉を続ける。

行き先を言う場合，「日本大使館まで」とか「○○ホテルまで」と切り出すと，高額になる。流暢なタイ語で，「ペブリ通りのアソック横町まで」でないと，安くならない。

② プアングマライを売る子供

新鮮な花びらを糸に通して図のようにしたものを，プアングマライと言い，仏壇に捧げたり，車にぶらさげてお守りにする。子供達がこれを持って路上で売っているのだが，クルンテープの車はけたたましいだけでなく，恐しい速度で走り回っている。その間をぬって，子供達が売り歩いているのだ。



夜12時でさえ，17歳くらいの子供や，時には10歳くらいの子供がプアングマライをさげて，信号待ちをしている車の間を売り歩いている。

しかし，花を売り歩く子供達は，決してすれていない。彼らが私の所に花を売りに来た時，私が「いや，けっこうです」という感じで，片手を上げて少し微笑んだだけで，「ありがとうございました」という丁寧な挨拶をして，彼らはすぐその場を立ち去るのだ。

先輩隊員の藤岡さんによると，学校に行かずこのようにお金を稼いでいる子供は，都市部においてもっとも多く，10%近くいるそうだ。

③ 通りの様子

大通りにはビルが建ち，日本の会社の大きな看板や，ネオンがいたる所で目につく。走っている車の後部には，日本の自動車会社の名前が大きく彫り込ん

である。日本製品が道に溢れている感じだ。

通りを歩く人の服装は，日本人とはあまり変わらない。タイ人の方が少しカラフルかもしれない。

ここでは，大声を出さないと話が出来ない。トゥク・トゥクという三輪タクシーや，古くなったトラックやバス，それにマフラーがないのか，古いバイクもバリバリと音を立てて走る。しかも，排気ガスと埃とりが，まともに目に入ってくる。

大通りの歩道橋には，ものごいをする人が2，3人座りこんでいる。裏通りに行くと騒音は少ないが，熱気と共に，道にこぼれた残飯汁の臭いが，所々で体を包む。

騒音と埃とり，熱気と臭気，花や布切れや新聞を車の中の人達に売り歩いている子供達。私はクルンテープの路上で，タイの人の強烈な活気と，失われていない心の優しさを感じた。アメリカと日本の色に大きく染まっていく今，それがより良く活かされるようにと祈る。

2. 文化および習慣の相違

小乗仏教国と言うこともあって，いたる所に寺があり，各家の庭には，スピリットハウスと呼ばれる日本の氏神様みたいなものがあり，家の中には仏壇，両親または先祖の写真に仏陀の像が置いてあり，初めてMichet氏の家へ行った時，最初にしたのは仏陀に三週間世話になることを先祖に伝えることで，仏壇に合掌。

これが日本と異なり，線香を手に持って最初に1回，お辞儀も1回。その線香を仏に供えて，その後1回合掌，1回お辞儀。これを3回繰り返す（後の部分だけ）。

葬儀においては，中国人とタイ人では全く異なり，中国人は土葬，タイ人は火葬。

中国人の場合の土葬と言っても，穴を掘るのではなく，レンガを積み上げその中に棺桶ごと入れ，上からセメントの蓋をし，セメントで蓋を塞ぐだけであり，その時は僧侶はお経は読まず，葬儀式執行代行人（親戚）がお経を上げ，僧侶は墓に来ては何もせずにいる。

全体的には日本人の葬式に似てはいるが，水素を入れたビニール袋を爆発させ，大きな音が村中に響き渡り，本当にその音が天国まで届くような感じの響きであり，残響が耳に残り，一種荘厳の感さえ沸き上がる。これは約10回繰り

返す。墓に着いてから終了まで1時間くらい。

引きかえタイ人の場合は，家及び火葬場近くにスピーカーを取り付け，一日中タイ音楽を鳴らしており（流すのではなく非常に大きな音），皆が陽気に話しており，あまりと言うより全く葬式の感じがなく，皆が20バーツで腹いっぱい食事が出来る集まり，と言う感さえしてくる。

近所の人々は，手に手に木片を持って火葬場に集まり，それで火葬にする。参列者にはアイスクリームが配られ，それから2～3時間僧侶のお経が始まる。

僧侶の数は約20人（中国人の場合は1人）。僧侶の中には，お経の最中に物を食べたり，タバコを吸ったり，関係のない方を見ていたりしている僧侶もあり，また全員がタバコを吸ったりもする。

私はタイ人の男性はすべて，一生に一度僧侶の修行を3カ月間するのだと思っていたが，修行期間は1日，3日，10日，1カ月，3カ月のいずれでも良く，しかし髪は落とさなければならず，また中国人であれば，修行の必要はないとのことでした。

修行は227の戒律があり，特に女性に触れられるのを彼らは嫌う。これは，これまでの修行が，女性に触れられることでダメになり，それで特に女性には気づかうそうです。また笑ってはダメ，実に厳しい戒律だそうです。

修行僧たち

乗り物に乗る場合，一応料金は差し出すが，相手は僧侶からは受け取らない。寺の前にあるバスの停留所では，一般客より僧侶の数が多い時がある。バス待ちは勿論くわえタバコ，厳しい戒律の反面，そのような楽しみ（？）が許されているのだろうが，初めて見た旅行者などは，彼らをどのように見ていくのだろうか。

子供の頭に触れることは出来ないと言われているが，彼らの両親は平気で彼らの頭を撫でたりもする。しかし，男の子供で，髪の毛の短いのに触れることは出来ないようです。

また，一般的な人々は，他人を訪問する時は時間も考えずに，深夜にも関係なく訪問してくることがあるので，驚くことがある。

他人の所のトイレに入る場合には，必ずティッシュペーパーなりを持参して入ること。多くの家ではトイレットペーパーを使用しておらず，入ってから考えるようになります。水は豊富にありますが……。

朝，昼，夕の挨拶は，日本のように声をかけるのではなく，互いに笑って済まし，昼，夕近くの挨拶は，「食事は食べましたか」と言う言葉が挨拶代わりで，タイ人は，おはよう，こんにちわ等の挨拶は好まないとのことです。

ワイと呼ばれる合掌は，初めて会った人または久し振りに会った場合のみで，毎日顔を会わせる人々にする必要はなく，微笑するだけで良い。

3. ドーンデン村見聞記

ドーンデン村には半日しかいなかったので，ほんの表面しか見ていないけれど……。

京大の東南アジア研究会の先生と，村の生き字引きのおじいちゃんの案内で，稲作団地の見学。水源からの遠近と作柄等についての調査や，所有者についての調査等を，数年間引き続いて行なっているそうだ。

土に牛の糞を混ぜて平らにした，5，6坪程の所で稲をたたきつけて，もみを取っている作業や，水引きの現場を見学した。また，畑では大きな如露を二つ肩から下げ，一つ一つの野菜に水をかける作業を見学した。この作業は夕方にかけての作業で，それはそれは一つ一つ丁寧に水をかけている。

保水を良くするため，苗の廻りは少し深く掘り，くぼ地になっている。種々の野菜や果物が，斜面になっている所にまで植えてある（水に近いからかもしれないが……）。黙々と働く姿を見ていると，誰が「タイ人はあまり働かない」と言ったのかと，怒りの念すら起こる。

田仕事や畑仕事の間に食事をするのだろう。木の下の小屋の近くには，タニシの焼いた殻が捨ててあったりする。カエルも食用にするらしく，貯えてあったりする。木の上に巣を作る赤い色の蟻は，食用にも薬用にもなるらしい。

村の生き字引きのおじいさんは，植物や動物を見るたび，料理の仕方，味などを教えてくれる。しかし，殆とんどの植物が食べられると聞くと，すごいなと思うけど，もしかすると，日本の雑草も食べようと思えばすべて食べられるのではなかろうかと，同時に思った。

雨期になると，水牛と牛引きしか通らないという道は，今は乾燥して，水牛の通った後はもうもうとした土煙で，むせ返ってしまうようである。道の両側には，牛が田に入らないように茨が植えてある。水がいっぱいで，どこが田で，どこが道かを牛に判らせるためだそうだ。

日没近く，飲料水の湧き出てくるのを待っている村娘３人に出会った。30～40分も待てば，湧き出るそうだ。飲み水はこの村には２カ所しかなく，飲める水は白く濁っていて，粘土層に似た土の所の水だそうだ。アブナムをする水は，どこからでも出るそうだが。

水溜りで子供も大人も，一緒になって水浴をしている。夕方にはかなり気温が下がるけど，平気で水浴びをしている。村の公衆浴場とでもいうのか，14，15人水浴びをしている。水牛達は，大きな池で水浴びをしている。夕陽の沈む池（湖といった方が良いかな）の畔で，群になって水浴びする水牛の姿は壮観だった。

夜は先生達と村長さん（村長さんの家に泊っている），生き字引きのおじいさんと，あとは村人２人と一緒に，タイ式の夕食をした。お米がとてもおいしく，大勢で食べるので，料理もとてもおいしかった。

手を使っての食事

食後，健康と幸福，それから，またこの村を訪れるように，お互いのことを忘れないようにという祈りをこめて，腕に糸をまいてくださった。これはラオスの風習で，東北タイ特有なものだそうだ。多くの村人がまいてくださった。10本以上になった。最低3日間はつけるようにとのことで，4日間つけていた。生き字引きのおじいさんには随分気に入られ，「親子の関係だ。村に来たら家で泊まれ。決して忘れるな」と，繰り返し言われた。別れを惜しんで，コーンケンに帰った。

たいして距離があるわけでもないのに，一歩町をはずれて農村に入ると，昔ながらの生活様式の村があるのに驚かされる。それにしても，どとででも見られるのは，コーラやファンタ，ペプシの看板だ。扇風機はどこの家庭にもあるみたいだ。テレビもかなり普及しているように思う。

4. 結婚式

10月28日昼，チャイナートの農地改良事務所で働いている，ピートとピースィが家にやって来る。明日の結婚式に誘ってくれたのだ。

雨が降ったばかりの道を揺られて，チャイナートの対岸まで行き，渡し舟で渡る。事務所でしばらく雑談を言い合ってから，明日の結婚式場（嫁マラーイの父の家）に行ってみようということになる。まだ3時頃なのに，事務所の車に乗って出かける。4時30分が仕事のひける時間だが，みんな部屋に上がって料理を食べ，手づくりの酒，つまり密造酒を飲みはじめる。日本の社会では，とても考えられないことだ。

下のふきぬきでは，近所の女性が15人程集まって，料理を作っている。庭には高さ2m程の大きなスピーカーが4本四方に置かれて，耳を塞ぎたくなる程の音量で，タイの音楽を終始流している。5時頃，車に乗って事務所に帰る。

29日，当日の朝4時頃，外がうるさくて目が覚める。3km以上離れているはずの結婚式場で，音楽を流しているのだ。近所の人は何も言わないのだろうかと，不思議になる。

6時35分，車で式場に行く。部屋の中は，回りにピンクや黄色の布が張りめぐらされ，色紙を切って作った飾りが，柱と柱の間につるしてある。青色やピンク色の蛍光灯が付けてあり，8人の僧侶の座る所に，八つの色とりどりの背当て（クッション）が置いてある。次のような表現をするとタイの人が怒るかもしれないが，まるで風俗の悪いけばけばしい飲み屋のような感じを受けた。

7時，式が始まり，僧侶が8人部屋に入って来て，各背当てのそばに座る。

橙色の袈裟を着た僧が座ると，部屋のけばけばしさが不思議になくなり，おごそかにさえ思えてきた。

お経が数十分間読まれた後，図1のように，各僧が順番に2人の頭にハケのようなもので水をふりかける。次に嫁と婿は図2のようにイスに座り，テーブルの上に置かれたクッションの上に両手を乗せて合掌をする。その両手の間に，親族や友人，職場の人，近所の人達が，揺れ具に入れた水を注いでいく。その間，僧侶は朝食を済ませる。

次に，図3のように，2人はきれいに飾ったバケツに果物やお菓子を入れて各僧にお布施をして一段落する。お色直しや着せ換え人形みたいな事はやらない。

タイでもお金を包んで出すが，職場の人達は1人当たり100バーツ(約1,000円)を出し合ったそうだ。お金を包む封筒には，名前など書かない。それを，8人の僧にお布施したり，結婚式の資金に当てる。出席者名簿等はない。

終始タイの音楽が，ボリュームいっぱいに流されている。専門の業者がやって来て音楽を流すのだが，機械を積んでいる車の荷台を見ると，アンプは真空管を使っており，扇風機で冷している。長時間使っていると真空管の調子が悪くなって，大きなスピーカーが変な音を立てだす。

しばらくたって，こんどは外に婿をはさんで2列縦隊を作り，各人果物や

図1

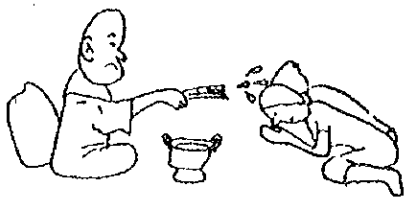


図2

図3

お菓子を手に持つ。昔は肉声でやっていたのだろうが，今は結婚式用テープがあり，「ヒョーホホホホ」という呼び声と共に歩き出して，嫁の父の家に入って行く。"妻請い"の行事だ。酒に酔った人が，「ヒョホホホホー」と言いながら踊っている。

その後8時30分頃，私達は庭に張られたテントに移り，酒を飲んだり食事をしたりして，3時頃までいた。酒に酔ったおじさんや若者達が，ソーラン節みたいな歌を，家の下のふきぬきで歌っている。びんやトタン板をたたいてリズムをとっている。婿と嫁は酒を振る舞って回ったり，名前入りの造花を配り，忙しそうだ。新婚旅行は一般にないらしい。

（藤岡・横田・大里隊員の報告書より抜粋）

友人の結婚式

コーンケン大学での日本語教育

職　種　日本語
氏　名　藤岡　小夜子
配属先　コーンケン大学

藤岡隊員の略歴

生年月日　昭和22年3月15日
出身地　徳島県
学　　歴　大阪女子大学卒
派遣期間　56年10月～58年10月

1. コーンケン大学の機構

(1) 学長の下に４人の副学長

学長の任期は２年。現学長は任期１年経過したところである。

(2) 現在は１０学部に大学院（修士課程のみ）が一つで計１１学部

① 農学部 ― 創立以来の学部で伝統を誇っている。

② 工学部 ― 農学部と同じ。

③ 理学部 ― 特色のない学部。

④ 人文社会学部 ― ２年前理学部より分離・独立。

⑤ 医学部 ― この大学の医学部はあまりむつかしくないとの評判。

⑥ 看護学部 ― 女の園。近代的な設備・建物で比較的新しい。

⑦ 教育学部 ― 付属の小・中学校を有している。日本へ留学する先生が多い。高校もある。

⑧ 歯学部

⑨ 公衆衛生学部 ― 医学部との関係はどうなのか判らない。

⑩ Associated medical science ― 日本語で何と言ったらよいか判らない。

⑪ 大学院課程（農学部・教育学部・理学部のみ）― プリンヤートォー（修士）が得られる。

来年は薬学部が創設され，１２学部になる予定。

(3) 学生数は各学部約400人（１～４年まで），全学で約5,000人の学生数。

先生の数は841人。

コーンケン大学は最終選択の大学だそうで，生徒の成績はあまりよくないそうである。イサーン（東北タイ）の学生を７割は入学させないといけないそうで，３割は東北タイ以外の地方から来ている。中に南タイのマレーシア国境近くから来ている学生もいるが，３割の多くはバンコク周辺の学生である。

イサーンの学生が多いため，学生の家は農家が多い。また，他の大学の学生に比べて，貧しい学生の数も多いそうである。学生の７割近くは，大学内にある２０棟の寮にはいっている。３人部屋は１カ月７０バーツ。２人部屋は１カ月100バーツである。大学内のソンティオ（ミニバス）は１バーツ。彼らの娯楽は映画。よく映画に行くようである。

※ タイの大学選抜制度

選抜試験は２回ある。コーンケン大学では１回目の試験は１月３０日(土)にあった。東北地方以外の学生対象の試験で，３割の学生を合格させる。こ

の試験に合格した学生は，２回目の全国統一テストは受験できない。不合格になった学生は全国統一テストを再受験できる。

全国統一テストは６選択できる。例えば，カウンターパートのスリラックさんの選択は

① チュラロンコン大学　文学部

② タマーサート大学　　文学部

③ チュラロンコン大学　教育学部　……等々である。

彼女は第一選択で合格なので優秀である上，小・中・高とチュラロンコン大学の付属校卒のエリート。

(4) 人文社会学部の組織

４つの学科から成る

① 外国語学科　英語・仏語が主流。日本語は選択。

② 図書館学科

③ 人文学科

④ 社会学科

2. 日本語科について

1981年度後期は，カウンターパートのスリラックさんと私の二人だけ。スリラックさんは1981年５月より公務員。それ以前は国際交流基金派遣の講師。1982年度からは，トヨタ財団の奨学金で１年半日本に留学していたサッシさんを加えて，３人で授業を受け持つ。

1981年度後期は，日本語1,2,3の３コースを開いた。最後の期末考査を受けた学生の数は，日本語１は７３人，日本語２は６人，日本語３は６人。目下日本語は選択科目の一つで，選択科目は６単位履習しなければならない。日本語は３単位なので，あと３単位を別の科目で履習しなければならない。

時間配当は次の通りである。日本語１は，スリラックさんが文法３時間，私が会話１時間。日本語２は，スリラックさんが文法２時間，私が会話２時間。日本語３は，スリラックさんが文法２時間，私が会話２時間。日本語１は人数が多いため，文法で３グループ，会話で６グループにわけた。

できるだけ多くの学生が勉強できるようにとの配慮で，正常の時間帯でない時間にも授業をしたが，前期は暑い上，気候も不順なので，８時３０分から４時３０分までの正常時間帯で授業を組んでいこうと，スリラックさんは話している。履習する学生の数は減少するかも判らないが ……。

時　間　割

		7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	1:00	2:00	3:00	4:00	5:00	6:00	7:00
月	藤　岡	日本語1会話	日本語1会話		日本語1会話		日本語1会話				日本語1会話		日本語1会話	
	スリラック						日本語2文　法							
火	藤　岡													
	スリラック	日本語1文法					日本語1文法				日本語3文法		日本語1文　法	
水	藤　岡													
	スリラック	日本語1文法					日本語1文法				日本語3文法		日本語1文　法	
木	藤　岡												日本語2会話	
	スリラック	日本語1文法					日本語1文法							
金	藤　岡						日本語2会話				日本語3会　話			
	スリラック													

今年は履習届を提出する頃に，プレム首相が訪日されたこともあって，日本語は大人気であったが，朝夕の寒さで落後した学生も多く（難しいとの声もある），最終的には全部で８５人であった。

４月５日から５月１５日までサマーコースを開くが，日本語２を２５人に限って教える予定にしている。

3. 日本語１の授業について

１１月９日より１９８１年度後期が始まった。しかし，授業は１１日から始める。

○１１月９日(月)

現在登録をした９１人と共に，４時３０分から６時までかかって授業の時間帯を決める。この時間帯に都合の悪い学生は，他の選択コースに移らねばなら

ない。約１カ月は見学期間で，１２月に最終決定の登録をする。

○１１月１１日(水)，１２日(木)

スリラックさんと一緒に授業をする。発音練習をしたり，教室で使う日本語の練習をしたりする。スリラックさんの授業は翻訳法の授業なので，コンビでする授業はとてもむつかしい。というのは，私にはまだそんなに語学力がないので翻訳ができないから。週３時間の翻訳法に慣れた頭を，１時間だけ切り換えさせるのはむつかしい。これは後期の間中続いて，授業中は必ず一つ一つ「その意味は何ですか？」と質問してくる。また，日本語の質問をタイ語に翻訳し，日本語で答えるから，みごとといえばみごとだけれど。会話をするということからいえば，ちょっと面倒だ。

○１１月１６日(月)

初めて１人で授業。１日６時間。出席者は９０人。自己紹介と挨拶を教える。

○１１月２３日(月)

自己紹介の続き　・〇〇学部の学生です。
　　・〇年生です。
時候の挨拶　・いい天気ですね。
　　・そうですね。

○１１月３０日(月)

文法の時間は文字の指導と，「これは何ですか？」「あれは何ですか？」等の文型練習なので，会話の時間に別のことをしても学生の頭に定着せず，１時間だけの会話の時間のむつかしさを実感している。

・～が好きです。

・良い天気ですね。暑いです。寒いです。

○１２月７日(月)

・わたしのうちは～です。

・コーンケンから〇〇で〇時間です。

○１２月１４日(月)

楽しく買物をしようと，１時間買物のプログラムをたてたけれど，楽しく買物できず，学生に混乱だけを残したようである。その後学生は，「先生，また買物しますか？」「買物はむつかしい」などと冗談を言ってきたりする。

○１２月２１日(月)

１２月２３日，森さんが来られ，授業もご覧になりたいとのことなので，自己紹介をしてもらうことにし，今日は今までの自己紹介を復習して，各人に言

ってもらった。第三者に聞いてもらえるということで，今日は特に熱心に学習したようだ。

○１２月２８日(月)

お正月で帰省した学生が多く，出席者は極めて少ない。ここの学生は（日本もそうかもしれないが）よく休む。

・文法の時間に学習した「これは何ですか？」等の練習・復習。

○１月４日(月)

お正月帰省の学生がまだ寮にもどらず，今日も２８日以上に少ない。

・新年の挨拶　　おめでとうございます。今年もどうぞよろしく。

・年賀状の書き方指導。

○１月１１日(月)

ほぼ学生もそろったので，もう一度新年の挨拶指導。

・お正月，どこへ誰と行きましたか？

文法の時間に動詞はまだ学習していないので，これも定着せず，この時間だけのものになってしまったようである。

○１月１８日(月)

発音の練習と dictation（簡単なもの）

「つ」と「す」，「す」と「ず」，「か」と「が」，「し」と「ち」

「ち」と「じ・ぢ」

単純な練習だが楽しく練習でき，繰り返しによって正しく発音できるようになった。

○２月１日(月)

文法の時間は「あります，います」なので，道具や絵を使って「あります，います」の練習。１月２５日(月)が大学祭であったことや，中国の正月で中国系学生が多数帰省し，スリラックさんも中国系で帰省のため休講で，学生は休みが長かったせいか，今日の授業はなかなかうまくいかなかった。

・～の上に，～の下に，～の横に，～の間に，～のそばに，～の前に，～のうしろに，○○があります。

○２月８日(月)――休日

○２月１５日(月)

・あります，いますの復習。

・○○に何がありますか。いますか。

○２月２２日(月)

・助数詞の練習 ― 本，匹，人，ばい，時，分，台，冊，枚。

・年号，月，日，曜日，誕生日。

--応この日で終わり，３月から試験句間。文法の時間には簡単な動詞まで指導している。この頃になって学生は言葉に慣れ，大きな声を出して発音練習に参加するようになった。タイの大学は休みが多いので，調子がでたと思ったらもう休みである。この学期を経て，スリラックさんとの授業の組み方や，練習のさせ方のコツがのみこめたので，次の学期では，たとえ１時間だけの会話の時間でも，うまく授業できそうであるが，サッシさんが加わるのでどうなるかが少し心配だ。大学の方では１９８３年より副専攻にしたいようなのだが，今の陣容では少しむつかしいような気がする。というのは，多分来年スリラックさんは日本に留学するだろうから。

※日本語１のテスト

中間考査は２時間の筆記テストだけ。期末考査は３時間の筆記テストと，５人グループ３０分ずつの会話と読みのテスト。目下，３月８日から１１日まで日本語１の会話テスト。

・簡単な質問に答えてもらい，短会話。

・教師への質問。

・読み（漢字，カタカナ，拗音，助数詞が読めるか，意味が判っているか。「へ」と「は」）。

授業の時はあまり活発でない学生も，いざテストとなるとよく勉強し，よく話せて上手なので，テストをしていても楽しい。これから会話もテストをしようと決心した。そつのない学生はテストの間に，「あなたはきれいです」とお世辞を言ったり，「日本語が好きです」と言ってみたり，「２１歳ですか」と質問したり。彼らの真剣さ（Ａが欲しい）が判るので，思わず吹き出してしまう。とにかく日本語１の学生は楽しい。今日のテストで４年生のグループがいたが，「もう私たちは卒業です（この部分はタイ語）。先生はとてもかわいいです。ありがとう」と言ってくれた時には感動した。

4. 日本語 2，3 の授業について

(1) 日本語 2

学生は６人。２人の学生を除いて，非常に不真面目なので不愉快だ。特に女子学生はあつかましい。教える意欲をなくすことが，しばしば。よく休むのでなかなか上達しない。いつまでも翻訳しあって相談して話すので，自信もつか

ない。丁度中途半端なところなので，仕方がないのかと思うが，少しもどかしい気がする。

日本語２は東外大の『日本語１の上』を使っているので，文法の時間に習ったものを基にして会話をしているが，本と同じことを言ってみたりして，個人と個人の会話にはなかなか至らない。

(2) 日本語３

学生は６人（男子４人，女子２人）。このクラスも女性２人は不真面目。彼女達は日本語２の学生のように休まないが，何もしないで来るので，他の人達の足ひっぱりになってしまう。とにかく女子学生亡国論を論じたくなる。ここのクラスの４人の男子学生は，さすが日本語３まで履習するだけあって，とても熱心に学習する。だから，女子学生でイライラとした気分が男子学生によって和んでくる。ゆっくり話せば，簡単な日常会話は可能だ。日本語３はお互いのことを話し合う時間も多くとれたので，心の交流もでき楽しく過ごせた。

６人のうち４人が卒業で２人残るが，「次学期は日本語４は開かないつもりだが，時間があれば日本語で話しましょう」と言っている。「今年は４年生なので，時間がとれないかも判らないが，もし余裕があれば話しに行きます」と彼らも言っている。今年の１２月の卒業式には教え子が沢山いるので，必ず参加しようと思っている。

5. 大学生活について

(1) コーンケン大学の卒業式

毎年コーンケン大学の卒業式は１２月に行なわれる。1981年度の卒業式は，

ガウンを着た卒業生（コーンケン大学の卒業式の日）

国王と皇太子と皇女の三人を迎え行なわれた。式にさきだって，担任とでもいうのか，先生に導かれて卒業式の服 ── コーンケン大学の服は男子は白の上下に白のガウン，女子は白のブラウスに紺または黒のスカートの上に男子と同じ白のガウン ── を着た学生が行進し，所定の場所に着席し，国王の来られるのを待つ。先生達は卒業大学のガウンを着ている。英国風の卒業式だそうだ。1人1人名前が読みあげられ，国王の手によって卒業証書が授与される。この日は寮が卒業生のために開放され，卒業生は寮で宿泊する。先輩と後輩の交流の場面もみられ，心和む日であった。しかし，多くの先生は式には参列しないで，それぞれの休日を過ごしていたようである。

この日，私は国王や皇女の部屋の生花を依頼され，ピンクのバラの花と大学構内の緑や白の葉を利用して花をいけた。大きいのが一つと中が一つ。鏡台の前にそれぞれ一つずつ二つ。洗面所にもそれぞれ一つずつ二つ。計六つ。朝9時頃から11時近くまでかかってしまった。例年の高く高くいける生け方と違う生け方だとは先生方の評。でも，今年は日本風でいけば良いと言って下さった。光栄な1日でもあった。

(2) 学生のクラブ活動の巡回公演

2月6日から8日まで，大学のコーラス部とランウォン（踊り）部の巡回公演について行った。この公演は大学の文化交流に関するものとして，費用は大学がすべて支払った。

2月6日朝6時，大学の2台のバスでチェンマイの少し南のランパンに向けて出発。途中，スコタイで昼食，お寺見学。ランパンには8時前到着。宿舎はランパンのヴィッテヤライ・クルー（教員養成大学）寮が我々のために開放されたのだ。とりいそぎ水浴び，更衣をし，町の公園へ。公園にはステージが設置されて，町の人が約100人位集まっている。コーラス部が5曲歌い，あとイサーン（東北タイ）の音楽とランウォン。深夜12時過ぎまで続いた。

学生の踊りは素晴らしい。女性の踊りの優雅な動きに対して，男性のユーモラスな踊りやダイナミックな軽業師なみの踊りに思わず目をみはった。みごとな踊りをした学生やカメーン（カンボジア人と同じ民族）の音楽を演奏した学生は，みなスリンから来ている学生。その中心的な学生は日本語を選択していて，旅行を共にして以来，彼らはよく勉強するようになった。

2月7日は，午前，ランパンのテレビ局で録画どり。コーラスとイサーンの音楽，ランウォン。昼前，チェンマイの花祭り見学に出発。チェンマイ大学，花祭り会場見学。夜はランパンの近くの由緒あるお寺，ワットプラタットラン

パンロアングでカントクディナー（北タイの郷土料理）をいただく。土地の小学生の北タイのランウォンが花を添える。夜，寮に帰る前にもう一度公演。ここは屋根のついた会場で，前日よりも多く集まっていた。私が外国人だと判るとジロジロみたり，話しかけてきたりする。前日と同じプログラムで公演。

2月8日は，世界で第6番目に大きいというプミポム（国王の名前）ダムを見学し，コーンケンへ。私はクルンテープで健康診断を受けるため，一行と別れもう一度チェンマイへ行き，夜行列車でクルンテープへ。

日本の大学のように，きちんとしたクラブというものはなく，大学のあちこちにあるグランドやコートで，好きなものが集まってゲームを楽しんでいる運動クラブや音楽（ロック）グループはある。同好会といった雰囲気である。夕方から夜にかけて活動している。それに対してコーラス部やランウォン部は指導する先生がおられ，大学附属の部といった感じである。特にコーラス部は，卒業式の歌などを歌ったり，公式の場に出ることも多いクラブである。

人文社会学部の先生方と（左端が筆者）

コーラス部の学生とは，2泊3日のプーカドゥンへの登山とこの旅行で，すっかり親しくなった。

(3) コーンケン大学の大学祭

1月23日(土)～25日(月)までの3日間。驚いたことは，先生が一生懸命手伝うことだ。学生は少ししかしない。中学の教師の私でも，生徒の自主性に

任せ，指導（立案までの過程）段階では議論し合い，口やかましく言い合うが，決定され，作業段階では手だし，口だしはほとんどしない。先生の動いている様子をみると，まるで日本の小学校の先生だ。

展示等も議論なしの思いつきでするから，中味のない薄っぺらな物で中学１年生にも劣る内容だ。我が外国語学科は，メジャーのフランス語科が展示・発表を行なったが，民族衣裳の絵，絵葉書の展示等おそまつ。芝生では，化粧をし，ピラピラした服を着，レコードにあわせてカンカン踊り。図書館学科では先生が人形劇をし，学生は見ている。誰の発表会なのか，何のためなのかと疑問に思ってしまう。

２４日は市内のカイヤーン（焼鶏）とソムタムの店を出張させ店開き。あわせてイサーン（東北タイ）の民族音楽演奏。楽しかったけれど，学生の活躍の場はほとんどない。

農学部では大学の広大な農園で作られた野菜類を，早朝（７時前から）バザールで売っていておもしろかった。新鮮で安いので毎日通って買った。展示は充実していておもしろかったが，内容は高校生程度。

夜はコーラス部の合唱。日本のテレビでよくある夫婦に同じ質問をし，○×をつけるゲーム。先生が参加。それと映画会。１日目は黒沢明の「羅生門」。２日目は小津安二郎の「秋刀魚の味」。私は２日とも参加。１日目は浴衣に下駄で参加。「Ajarn とてもかわいい」と学生に囲まれ，ご満悦。それぞれ 200 人位ずつの学生が見たようである。学生評は「羅生門」の映画は意味は判らないが，「秋刀魚の味」は少し判ったようである。

６月には国際交流基金の映画会を開く予定。来年は他の学部の展示もみてみようと思う。

6. １９８２年前期の状況

前回にも報告した通り，今学期は日本語の時間は平常の時間帯にくみ入れることにした。前期は，新入生が選択できないことと，上級生もそれぞれの専門科目の履習をし，あまり選択科目は履習しないこともあって，前学期より人数が減った。しかし，恐れていた程減らなかったので，ホッと胸をなでおろしている。

目下は，日本語１：約５０人
　　日本語２：６人
　　日本語３：２人

日本語1は3グループで，スリラックさん2グループ，サッシさんが1グループ。私はそれぞれのグループの会話を1時間担当している。週4時間。

日本語2，3は，スリラックさんと私で文法2時間，会話2時間の週4時間。

サッシさんは英語の先生だが，五井先生（交流基金専門家でチュラ大日本語科の先生）の紹介で，トヨタモータースの奨学金を得て，1年半国際学友会で勉強した人である。現在も，日本語と英語の両方を教えている。

彼女は親日家でなく，どちらかといえば反日家であるので，日本語の講義の熱心さに疑問を抱くことがある。最初のことで不慣れなため，私の目にそういう風に映るのかもしれない。しかし，彼女のクラスの学生が1カ月も経たないのに，10人以上も drop out してしまったことからも想像できるのだが……。それと今までの日本語クラスの人気は，スリラックさんの努力に負うところが多いと再認識もした次第。彼女は今年留学生試験を受けるが，彼女がいなくなった後の日本語セクションは少々心配。

私の方は学生の様子も判ってきたのと，慣れてきたので，今年は教材作りに励んでいる。スリラックさんとサッシさんも，日本語1の教材作りをしている。幸いタイプライターを送っていただいたので，それを使用してきれいな印刷物を学生に配布することができている。

こちらが慣れてきたからばかりではないが，多忙な前期にもかかわらず履習している学生は，やはり熱意のある学生で，数は少ないがとても真面目である。こちらも指導に熱がはいり，やりがいがある。日本語2，3も少数だが，活発で楽しい時間である。

目下，先生がたにアンケート調査をまわしているが，来月位から先生方のための集中コースを開く予定。学科の方では有料にした方が良いとの意向で，週

学事計画

事項	前期	後期	事項	前期	後期
入寮日	6/9~12	11/3	在籍届，履習届，追加履習届最終日	6/28	11/19
新入生入寮日	6/10・11	11/3	履習辞退届最終日	7/16	12/7
新入生英語考査	6/12		サイ・クルー（先生への合掌礼の日）	8/19	
在学生進級履習届，諸経費納入日	6/12~14	11/4~6	大学創立記念日		1/25
オリエンテーション	6/14		最終説明会	9/14	2/14
新入生履習届諸経費納入日	6/16~17		授業最終日	10/5	2/25
授業開始	6/18	11/8	期末考査開始	10/8	2/28
諸経費最終納入日	6/18		学期末	10/21	3/12

3，4時間の予定。主に私が指導の予定。徴収したお金は日本語セクションのために使用するとのことである。現在，学生と一緒に勉強している先生が3人おられる。

初歩の段階なので，授業形態を固定化し，あせらず，欲ばらず，何とか波に乗せられたような気がする。私が日本語1から教えている日本語2の学生は，前学期の日本語2の学生より言葉に慣れ活発である。4カ月だけの差なのに，人の意識の差は大きいと痛感している。

前頁に，今年度の大学の学事計画を記す。

○日程表にはないが，中間考査（前期）は7月末から8月上旬の予定。

○卒業式は例年12月ということだが，日は未定のようである。国王のスケジュールにあわせて決定されるそうだ。今年は式典にぜひ参加したいと思っている。

○国際交流基金映画会が7月16，17，23日に大学との共催で開かれる。

7. 1982年後期の状況

今学期はスリラックさんと私の二人で担当。サッシさんは今学期は英語に専念。というのは，英語の先生が1人突然やめたことと，12月にアメリカに留学する先生がいるため，どうしても英語の先生の不足を補えなくなったためである。サッシさんにとっては，日本語を教えることはとても苦痛のようであったので，今学期はとてもいきいきと仕事をしている。彼女は3年だけ日本語を教えたら（留学期間の2倍は勤めなければならない）英語に専念するだろうと思われる。

日本語の専任講師がスリラックさんだけということで，英語のサッシさんの応援を頼んだことが，そもそも根本的な解決を遅らせていることになっているように思える。今学期は，また良い時間帯にくみ入れられていた。10：00～11：00，14：00～15：00，15：00～16：00といった時間帯である。なのに，サッシさんが英語にまわってしまったことで，時間変更を余儀なくさせられた。学生にしたら履習届提出後のため，授業の合間の，しかも何十人もの合意を得るとなると，良い時間はとれず，また昨年の後期のように7：00～8：00，16：30～17：30という変な時間帯に教えざるを得なくなった。こうなると学生も，また履習変更をしてしまうことにもなりかねない。日本人が協力をして授業を教えることも良いのだが，ボランティアは単位を与える権限を持たないので，必ずタイ人の教師がいないといけない。そのためにも，もう1人位は日本語専

任の講師をコーンケン大学として獲得すべきだと思う。これはＪＯＣＶの問題でなく，タイのコーンケン大学の問題なのだ。

私にとっては，ここコーンケン大学は住み良い土地だ。しかし，多くのタイ人にとってはあまり魅力のない土地なので，ここを定住の地とはしないようだ。物価が高く，生活するのに大変でも，チャンスが有ればバンコクへ行こうとする。また，ここでは教員寮の不足で，職場はあっても住む家がない。その上，お給料は安いときているから，この土地の人ででもなければ，ここにわざわざ来て住もうとはしない。そんな上に，英語の先生は他のどの学部の先生より仕事量が多く大変なので，良い条件のところへ変わろうとする。また，そのためにより高い学位を得て，移るチャンスを得ようとしている。という訳で，日本語コースにまで話が及ぶのはまだ先の先のことで，副専攻の計画もいつ実現するやら。実現のためには，タイ人をもう１人入れることが先決のように思われる。

そして，今回対立候補がなく，カウイ学長が再選されたようであるが，学長への不満は学生，教師にも多く，もっぱらの噂では学生デモがあるだろうとのことである。昨日も学長再選の大きな立看があったが，今日は下の方が破られ，紙の下より今流行のドラエモンの漫画が顔を出すという，ちょっとおもしろい現象がみられた。急を要する住宅問題に，今年やっと重い腰をあげたのだが，まだ住宅不足は解決されない。医学部関係の人の家は完備しているのに……。学生は今年度は自治会(?)が結成され活動している。しかし，日本と異なり政治的な活動はあまりない。昨年はなかったローイカトンは，今年自治会主催で行なわれた。

学長は一応学科で推薦し，学部へ持ち寄り，学部から大学へと下から上へ推薦を固めて行く。それを大学庁関係者が審議し，承認という型をとっていくらしい。今年の大学からの推薦はカウイ学長だけだったということだが，不満が多いのにどうしてそうなっていくのかと不思議でならない。権力の構造を考えると判らないこともないのだが……。とにかく，末端では問題がとても多い。早急に解決しなければならないと思うのだが……。

日本語に話を戻して，各コースの受講希望者は，日本語１：35人，日本語２：10人，日本語３：４人。しかし，今学期より１０人以下の開講は認められなくなったので，日本語３はカットされ，４４人でスタートする予定。あと，日本語を勉強したい先生方が５人いて，私の時間が6時間と少ないので，週２時間だけの会話コースを開く予定。文法は学生と共に復習ということになる。

サッシさんがやり始めていた日本語１の教科書作りを中止してしまったので，今学期は日本語２の方の教科書は一応おいて，日本語１の教科書を作り，来学期はプリントを順次渡すというのではなく，最初から製本したものを手渡そうと考えている。新しい交替ボランティアにも手を入れてもらい，より良いものができれば，ＪＩＣＡよりお金を援助していただき，きれいな紙の教科書作りに道をつないでいきたいと思っているのだが……。

そして，前学期より言われている放送番組作りにまで手を伸ばせたらと思っている。でも，それより前に日本語２の学生は１０人と少ないので，あいている時間で個別会話練習をしてあげたいと思っている。日本語１までできると良いが，そちらの方は少し無理だと思う。残り１年，本当に２年は短い。やっと慣れ，軌道に乗りかかったと思ったら帰国しないといけない。次の人へ継続させていくためにも，教材やテスト，指導法などをきちんと記述し残していこうと思っている。とにかく，来年はスリラックさんも許されるなら，国際交流基金の奨学金を得て１年間（文部省の試験に合格したら，引き続き２年か３年）留学する予定になっている。交替隊員はサッシさんと組み，やっていくことになる。大変だろうと思われる。そのためにも教材類の整備が急がれる。余裕もできてきたことでもあるので，どんな小さなこともメモとして残していこうと考えている。授業は明後日からだ。

日本語Ⅱの学生と

8. 交替隊員について

○○のようなタイプの人が良い等と，おこがましくて書けない心境だ。が，外国語学科の先生方を観察し，また，先生方のおしゃべりの中から推察して，先生方と仲良くやっていけそうな人のタイプを記そうと思う。

(1) 言葉

英語のできる人が良い。わずか2カ月余のタイ語の勉強では，小学生程度の会話しかできない。周囲の人と会話をしたり（もしスリラックさんが留学していなかったら……）色々詳細をたずねるためにも，英語ができる必要がある。英米ボランティアも共に参加の会合は英語である。1年経過後の今もむつかしい単語は判らないので，学部長は英語で話してくる。但し私の答えはタイ語の方が楽になってきているが……。

大学の中では英語が通じる。1カ月の現地訓練でタイ語を勉強したら良いと思うので，大学に行く人は英語の勉強に切り換え，未整備の現地語学訓練をきちんと講師等の招き入れをし，みっちり1カ月タイ語を学習するという方向に切り換えたら良いと思う。駒ケ根語学訓練の変更を提言する。但し，大学以外の主に一般の人と付き合う人は，従来通りのタイ語の学習をすべきだと思う。

(2) 学歴等

目下，学科の中で学士の先生は4人のみで，他はほとんどが修士。博士も現在2人いる。タイは学位社会であるから，できるだけ高学位の人が良いように思う。

また，日本語の知識があるのは言うまでもない。もしスリラックさん不在の時は，実際に日本語を外国人に教えた経験のある人が望ましい。というのは，サッシさんは経験も少ないし，知識も少ないから。私の場合は，永年の国語を教えていた経験から，学生の反応で（1時間だけで特に参観していなくとも）スリラックさんやサッシさんの授業がどういうものであるか見当がつく。それに従って授業も進めていった。教壇に立った経験のある人が，いずれにしてもより良いことは間違いない。

基礎段階を終えつつある今，充実期をめざしてより高度のテクニックを有する日本語教授者が加わることが，コーンケン大学にとっては良いことだと思う。

国際交流基金もコーンケン大学の副専攻化に関心を持っているようである。以前，カセサート大学にいらしてた坂本先生のような立派な先生と，ボランティアの組み合わせは，とても良いことのように思える。ボランティアも教えら

れることが多いし……。

但し，国際交流基金派遣の専門家も大学を出てすぐという人もあるようで，もしボランティアとの差（年齢や学歴，経験）のあまりない場合は，共存するのはむずかしいと思う。が，コーンケン大学のことを考えれば，セクト意識を排除し，共存する方向に両者で話し合いが持たれるべきだと思う。先月，出張でタマサート大学に行ったが，その時日本人ボランティアに関心を持っていると聞いた。英語では多くのボランティアがいるからという。しかし，国際交流基金から派遣の専門家やパートタイマーがいるからと，それ以上話はすすまなかった。主婦のパートタイムより，終日一緒にいるボランティアの方がより良いに決まっている。タイの日本語の現状を考えると，今の状態は本当によくないと思う。

専門家とボランティア，派遣先が異なるのでむつかしいのだろうが，一本化は無理なのだろうか。もし一本化ができるなら最高だけど，一本化がとうてい無理なら，もっと話し合いをもっても良いと思われる。

(3) 性格

言うまでもなく明朗な人が良い。そして，あまり若くない人の方が良い。周囲が30歳前後だから（スリラックさんが最年少で25歳，次は28歳）。感覚的には日本人ととてもよく似ているので，日本の常識の判る人なら良いと思う。同じアジア人，同じ人間。そう大きく変わろうはずがないというのが1年間の実感。そして，知識階層の意識はとても日本人に似ていると思う。恥を嫌い，行儀の良さを要求するプライドの高い人達の集団だと思う。日本で健全な人間づき合いのできていた人なら，ここでも通用するはずだ。日本でできないことは外国でもできないことが多いはず。私の場合，周囲の人達からずい分助けられ楽しい思いを沢山してきた。周囲の人を大切に思う気持ちがあれば，理解してくれ，孤立することはないと思う。対話を心がける必要があると思う。

9. 後期の時間割

日本語1の生徒が多く，文法を2グループ，会話を4グループに分けることになったため，スリラックさん10時間，私が8時間となった。あと月曜日か火曜日の夕方1時間，先生のみの会話のクラス。木曜日に日本語2の学生との個人会話レッスンの時間をとることにした。前の学期の学生よりも少々幼ない感じだが，これから4カ月どう成長していくか楽しみだ。

目下，曹洞宗ボランティアが図書館学科の移動図書館に協力しているが，日

本から送られる絵本の翻訳をして図書館学科に協力する形を整えつつある。タイ日，日タイ辞書類も何冊か日本語科あて，寄贈していただける予定である。

後　期　の　時　間　割

		7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	1:00	2:00	3:00	4:00	5:00	6:00	7:00
月	藤岡						日本語2会話			日本語2会話				
	スリラック								日本語1文法					
火	藤岡													
	スリラック								日本語1文法	日本語2文法			日本語2文法	
水	藤岡									日本語2会話		日本語2会話		
	スリラック								日本語1文法					
木	藤岡		日本語1Ⓑ会話											
	スリラック									日本語2文法	日本語1文法			
金	藤岡		日本語1Ⓑ会話				日本語1Ⓐ会話		日本語1Ⓐ会話					
	スリラック						日本語2文法				日本語1文法			

帰国して思うこと

藤岡　小夜子

タイでの最初の1カ月は，暑くて汚くて不便でと，腹ばかり立てていた。が，やがて日本との比較ではなく，素直な心で物を見，考えられるようになった。そうなると，すっぽりとタイの生活にはいり込めるようになった。

そして2年。あっという間に過ぎてしまった。しかし，今までの歳月の中で，最も充実し，意義深い2年であったように思う。

ゆったりと自然と共に生きる暮らしは，子供の頃を思い出させた。水牛に乗った少年が家路に向かう頃，熱帯の赤い大きな太陽が地平線に沈むのを，感動をもって眺めたものである。そして思った。人間にとって，何が最も幸福な生活なのだろうかと。物質文化に毒された心には，本当に安らぎの時であった。

しかし，物質文化の波は，徐々にタイを侵し始め，人々の暮らしぶりは，少しずつ変えられようとしている。市場で1人のおじさんが，「日本人は金持ちだ。我々が日本の車や物を買っているから，君らは金持ちになるんだ」と言った言葉が，やけに耳に残っている。

旱魃に悩まされた一昨年は，稲も植えられず，地割れのした水田が続いていた。それを見る度，自然に翻弄される人間のちっぽけな存在を思いしらされたものであった。自然の恵みに脅威，それをもっと認識すべきであろうと痛感している。最近，自然保護運動が，あちこちで展開されている。自然に対してあまりにも尊大であったことの反省もこめ，地道に続けられると良いのにと思っている。

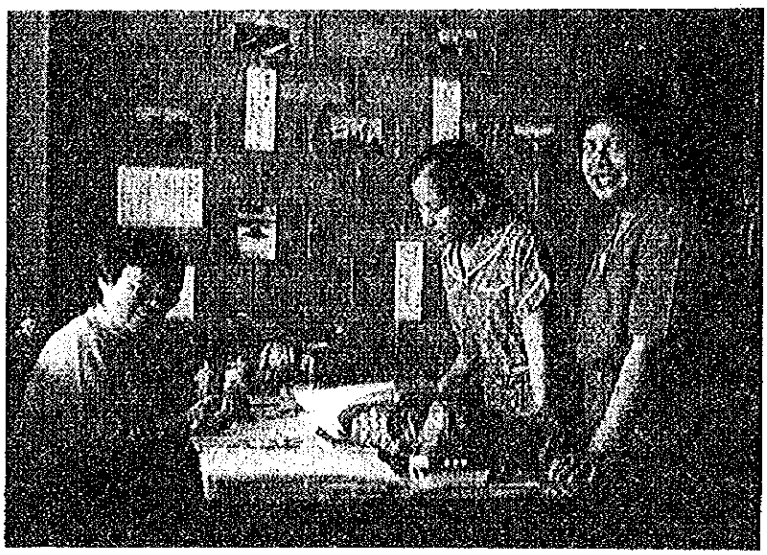
外国にいると，日本の出来事は○○地方のことではなく，日本のこととしてトータルな見方ができる。そのために，傾向や孕んでいる危険性が鮮明に見えて来，何とかならないものかと，いつももどかしさに責められていた。帰国した今もそれは続いている。

在任中，教科書問題が，タイの新聞で連日報道され，日本人としての立場が微妙な情況の中で，すっかりまいってしまったことがあった。しかし，友人達は，私を理解し，以前にも増して，親しく接してくれた。そんな友人やいろいろな人々との触れ合いの中で，喜びや悲しみは理解し合えるものだと判った時，タイがとても好きになり，楽しくなってきた。

住めば都。私の都はタイの東北，コーンケン。そこには，多くの素敵な人たちがいる。アジア人でいながらアジアのことを知らず，アジア人としての視点を忘れていた。その反省もこめて，教職にある私は，生徒たちに，私の見聞した事等を伝えようと思っている。

帰国してから10カ月の間に5人の友人が来日し，京都や奈良，広島等を一緒に旅した。また現在留学中の3人の友人とは，電話や会うことで，友情を保ち続けている。新しく生まれた友情をこれからも育て続けたいと思っている。

今は夏。1日3回の水浴びが私の消暑法。暑さと共に，タイの生活がもどってき，テレビから聞こえてくるタイ語に耳を澄ましているこの夏である。



学部の自室で

藤岡隊員の報告書を読んで

佐久間　勝彦

最も印象的だったのは，隊員が仕事面のみならず，生活面においてもタイの文化・社会に積極的に溶け込み，そこで直面した様々な問題について，時には素直な喜びや怒りを混じえつつ，きわめて率直に報告していることである。

隊員が必ずしも経験豊かな日本語教育の専門家でないことはいうまでもないが，持てるものすべてをぶつけて，赴任先の日本語教育プログラムを整備すべく奮闘した，その姿勢・情熱は，青年海外協力隊員としての使命を支えるものであり，高く評価されるべきものであろう。そして，その2年間の経験が何よりもまず隊員自身にとっていかに大きく貴重な意味を持つことになるか，それは我々の想像を超えるものであるに違いない。

ここでは，隊員が「交代隊員について」の部分で書いていることから，今後に向けて我々の考えるべき問題を2，3，取り上げることにしたい。

(1)　語学力の問題

コーンケン大学で仕事をするには，「英語のできる人が良い。わずか2カ月余の語学の勉強では，小学生程度の会話しかできない」，というのが同隊員の意見である。やはり，仕事の打ち合わせ等で用いる言語は十分堪能であることが望ましい。しかし，その土地の普通の人々と接するために現地語が不可欠であることはいうまでもない。

なお，これは日本語の教授法に関連することだが，しばしば耳にする，日本語を効果的に教えるために現地語（学習者の母語）ができなければ……という考え方について一言述べておきたい。

それは，日常会話が普通にできる程度の語学力（学習者の母語）では，日本語に限らず，教えようとする言語の構造や意味・用法などについて説明を与えることはまず不可能であり，時には学習者を混乱させる恐れさえある，ということである。やはり現地語の学習は，あくまで生活のため，その土地の人々に直接触れるためと考えたほうがよいと思うが，もし余裕があれば，学習者の母語が単一であるような場合に，その言語の持つ音韻体系や文法体系についての基本的な特徴を調べ，学習者の日本語学習上の困難点を予想してみたりすることは，大いに意味のあることである。

(2) 学位の問題

隊員は，「目下，学科の中で学士の先生は４人のみで，他はほとんどが修士。博士も現在２人いる。タイは学位社会であるから，できるだけ高学位の人が良いように思う」と述べているが，ここには慎重に考えるべき問題があるように思う。

高い学位を尊重する外国の大学社会で辛い経験をし，同様の感想を抱いた隊員も少なくないと思われるが，「青年海外協力隊」はこの種の問題から自由であってもよいのではないかというのが，私個人の現在の考えである。同じ博士号でも，国によって，また専門分野などによって，その意味や取得困難度は異なるわけで，それを正当に理解し合う努力をすることも国際相互理解の一つではないかと思うからである。

日本の大学で博士号を濫発したり，日本の国際交流団体が博士号を持つ人材を数多く海外に派遣したりすることで解決できる種類の問題ではないように思う。

(3) 性格・年齢の問題

隊員は，現地人スタッフが30歳前後であることから，「あまり若くない人の方が良い」とし，「日本の常識のある人」，「日本で健全な人間づき合いのできていた人」と述べている。これは単に年齢の問題でなく，人間的に大人で，現地人スタッフと楽しく仕事をするのに必要な協調性・明朗さ・忍耐力といった性格的条件に通じる指摘であろう。

すなわち，その土地に一時的に滞在する協力隊員としての立場をわきまえ，主役である現地人スタッフの手による仕事を強力に後援すべく，骨身を惜しまず活動できる人材であることが肝要であろう。同隊員は，「私の場合，周囲の人達からずい分助けられ楽しい思いを沢山してきた」と述べている。ここに，隊員が現地での活動や交流を通して逆に学んだものの大きさが示されているように思う。

最後に，藤岡隊員は次のような大変重要な問題を指摘している。「国際交流基金派遣の専門家も大学を出てすぐという人もあるようで，もしボランティアとの差（年齢や学歴・経験）のあまりない場合は，共存するのはむずかしいと思う。が，コーンケン大学のことを考えれば，セクト意識を排除し，共存する方向に両者で話し合いが持たれるべきだと思う」。

これは，日本語教育に関する我が国の政策上の立ち遅れを示唆する，現場からの貴重な“苦言”であるといえよう。隊員の指摘に関連して，２点述べてお

きたい。

まず，海外に日本語教師を派遣している団体・機関が，定期的に事務レベルでの連絡・協議を行う場を設けることが是非とも必要である。派遣主体の事業の基本方針等を確認し合った上で，役割・責任の分担を行い，派遣先の日本語教育事情に関する情報等を積極的に交換したりすることが望まれる。

数年前に比べ，世界各国からの要請が著しく高度化した現在，我が国の日本語教師派遣事業は，よりきめ細かな対応が求められる時期に来ているといえよう。派遣された日本語教師個人が，「セクト意識を排除し，共存する」などといった努力をしなくても済むよう，早急に対策を講ずる必要があるのではなかろうか。

第二に，これは派遣事業の基礎条件といえるものだが，日本語教育を専門とする人材養成の問題がある。

海外からの要請がこれほど高度化してきているにもかかわらず，我が国では，教授法・教材研究・教育実習等を含む，しっかりしたカリキュラムを持った日本語教師養成システムが皆無に近い。国レベルの対応の遅れは，我が国の大学における現行の国語教師・英語教師などの養成制度と比べてみれば容易に理解されよう。国際交流基金がもっと優秀な専門家を派遣すればよいといっても，養成された人材の蓄積のない現在，それはかなり無理のある注文に思われる。

日本語教師が国語教師とも英語教師とも異なる専門家であることは，今や常識となってきているが，それでも，優秀な日本語教師が少ないこともあって，国語教師や英語教師が日本語教師として派遣されることがある。しかしこれは，卓球の指導者という要請に，テニスの指導者を派遣して応えるようなものである。

一生の仕事として日本語教師を志す若者が大学で4年間，さらに専門的に勉強したければ大学院で何年間か，十分な訓練が受けられるような制度を作ることが急務であろう。そしてそれが，より充実した日本語教師派遣事業を保障するものであることは，いうまでもない。

（協力隊技術専門委員）

バンコク駅

職業訓練学校からの報告

職　種　電子機器
氏　名　横田　和夫
配属先　ハジャイ高等職業訓練学校

横田隊員の略歴

生年月日　昭和31年2月8日
出身地　福島県
略　　歴　東北工大卒
派遣期間　56年7月～派遣中

1. 協力活動の開始

駐在員（坂牧氏）が引き上げた後，まずは電気に関する質問，特にタイ人の先生に関してすぐに回答できる様，職場に大学の教科書を持ち込み暇を見ては読んでいた。職場に初めて行った時に驚いたのは，先生の名前が似ていること。このため，覚えることが出来ず，名前を覚えることから始めたのが，仕事の第一歩だった。

カウンターパートより，私の好きなというより教えることの出来る教科を聞かれ，その教科の実習を他の先生とみるということになった。3～4の教科でも同じ実習を8回も教えることもあり（生徒が8回とも異なる），1日3時間程度。先生の平均授業時間，1週間32時間程度，多い先生で42時間，少なくて28時間（私より若い21歳の先生2人は，28時間）。

さて，最初の1日目はカウンターパートと学校内の他の学科に挨拶回り。それがすみ電子科に戻ると，故障の測定器があるとのことで，まずは必要な測定器の修理に取りかかった。高圧の直流電源器，約30台。良否を測定後，故障の修理となるが，約70%近くが故障しており，中には修理の跡があるが全くデタラメで，電解コンデンサーの極性が異なり，異常電圧が発生して他のコンデンサーがパンクしているのが多く，それが分かった後はスムーズに修理が出来た（なぜなら，コンデンサーの極性だけを見分ければ良いので）。

この修理は，実習の無い時間にすることになっていたが，私が簡単に修理するので，時間に関係なく，実習も見る必要もないから修理してくれとのことなので，約3日間，電源器の修理。それが終わると発振器，これも約30台のうち80%が故障。これは全部がトランジスターの故障で，カウンターパートが修理用に購入してあったトランジスターの交換ですんだが，中にはトランジスターの極性がやはり逆で，故障となっているものもあった（修理の跡がある）。これに1週間。

次にオシロスコープ。これは故障が電源トランスのショートのため，部品が無く修理ができず，それ以外は2日で修理し，その後はテスターの修理にとりかかった。これは差動アンプのFETの故障のために，FETの購入が現地では不可能と思ったが，代替FETが出来そうなので（KRTP＝クルンテープ，バンコクの名称，で購入可能），そのFETと交換してメーターの目盛り通りに測定可能かの旨を，日本の三和電気計に問い合わせたが（12月23日現在），返事なし。約50台が修理不可能です。

これが現地に着任して３週間程にした仕事です。この修理により，現地人の私に対する態度が決まったようです。

すなわち，私の電気に対する知識の程度が，どれ位なのかが。それ以後，測定器が故障すると，私の所に先生が来て種々と聞くようになりました。生徒も同様です。

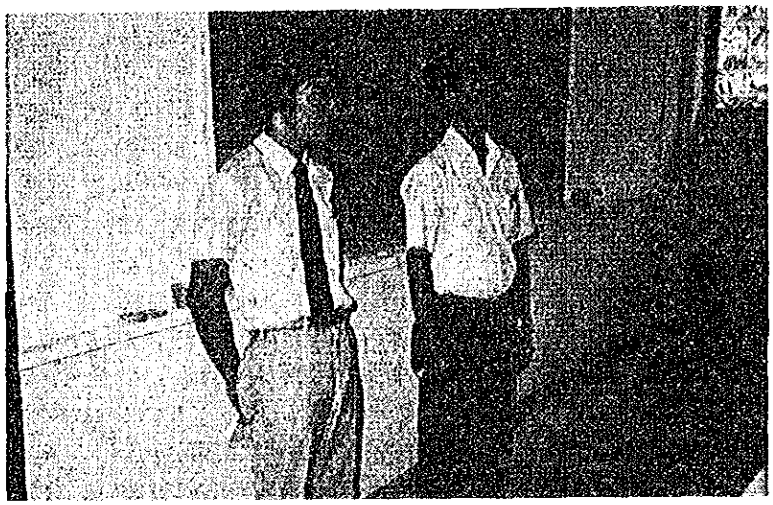
測定器の修理が一段落し，今度は実習の指導。生徒の実習（回路の配線による測定器の故障を少なくするため）をグルグルとコマネズミのように歩きまわり指導。測定回路を見て測定方法の誤り（１Ｋ～３０KHZの周波数の電圧を普通のＡＣ電圧計で測定している）を見ては，そのことを相手の先生に指導したり，また今後の測定法に関しても同様に指導したりしている。ところで，別の測定器を用いた測定法については，現在，その測定器がこの学校には無く，今後どのような測定器を購入するか等，かなりの問題（課題）がある。

授業に関しては，日本の工業高校程度ではあるが，似たようなことを１年，２年，３年と教えており，各先生が重複して教えていて，時間的に無駄なようである。これは学校側の問題というより文部省の指導要領書にあり，それ以上に先進国の会社による高度の電気，電子器具の販売にある。

組立工場はあっても，回路図の公表もなくアフターサービスもなく，ただ単に売るだけであり，上・下層のある国において，他方は真空管の白黒テレビ，かたやＩＣのカラーテレビ，その上にＬＳＩを用いたＶＴＲ，これらが故障しても部品もなく修理できるか／

学校で教えることが出来るのは，２年間か３年間。中には１年生でアルバイトをしている生徒もおり，実戦に役立つ知識を教えるにしても時間が無い。真空管からトランジスター，ＩＣ，ＬＳＩ，ラジオからテレビ，ＶＴＲ，送信機など，教えるのは種々数多くある。だが，好奇心の強い子供にこれらすべてを理解させるには，あまりに幅広く，電子技術が日進月歩で進み，発達している時に十分なことが出来ない。

日本人の私でさえ頭が痛いのだから，タイ人の先生にしてみれば，それ以上だ。はっきり言って，ついていけない先生が数多くいるのが現状だ。日本の明治維新なんてものではない。それ以上なのだ。ＩＣ／，ＬＳＩ／，何っ／マイクロコンピューター，そんなものどこで必要だ／，ここは先進国じゃないぞ，会社も考えて物を販売してくれ。しかし，１０年後，いや２０年後，確実に一歩，一歩進んで先進国になるだろう（私の友人の先生のような人間だけだったら）。しかし，焦る。



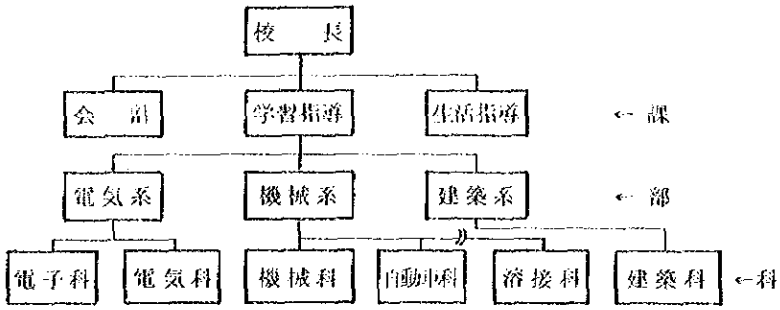
電子科の主任と筆者(左)

2. 職場事情と学校機構

私の任地のハジャイ市は，南部タイ第一の都市（人口約５０万人）で，マレーシア国境に接しており，国境まで約１００km。

そこのHAADYAI TECHNICAL COLLEGE（元職業訓練校）に配属。人によると，タイの職業訓練校の中で，最も大きい学校だそうです。タイの行政を見るとカレッジにもかかわらず文部省管轄。大学は，大学省と別になっており，一本化されていない。

・学校機構は次のとおり。



（私の配属は電子科）

・各科の生徒数及び教師数

	生徒	教師
電気科	450	12
電子科	450	11
機械科	250	12
自動車科	300	13
溶接科	200	14
建築科	350	8
計	2,000	70

文化系の教師
２８人
計９８人

・予算（年間）　５６,０００,０００円程度

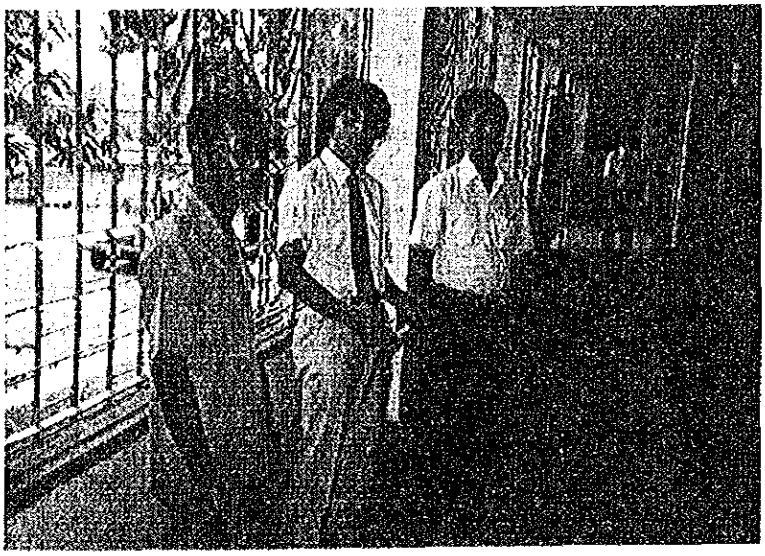
・生徒１人当り　　８０,０００円の教育経費（文部省支給）

・生徒の教育期間

２年間コース　２１歳～２２歳

３年間コース　１６歳～１８歳

５年間コース　１６歳～２０歳



校長先生と

5年間コースは大学で2年間学べば，学士の称号が得られ，3年間コースは5年間コースに移るか，あるいは大学へ進学すれば学士になれる（5年間コースに移った後，大学で2年学ばねばならない）。2年間コースは，大学への編入は出来ない。しかし，たまに大学で編入募集がある。そうすると2年間コース卒業後，大学で学び学士になれる。

この国においては，学士の称号があるだけで友人関係が左右されるので，重要だそうだ。ところで，元の教育制度で18歳～19歳で教師資格が得られ，学士の称号を必要としないほど，教師数が不足している。現在も学士でなくても教師になれる。

3. 業務活動の内容（1）— 1年目

私が着手した業務の内容は，測定器の修理，および教師へのアドバイス。その中で私が気づいた，教科，実験，教育の問題をのべてみたい。

まず，各教科は，一応文部省の指導書に基づいて行なわれる。ただし，教科書というものがない。各教師個人で教科書を見つけるか，またはガリ版で印刷して使用する。1週間に理論を2時間，それについての実験3時間と実験（実習）時間が多い。

タイの実験方法は日本と異なり，1クラス40名が4～5名程のグループとなり，同一テーマの実験をするので実験回路，測定器が多数必要となる。これらの実験は，実験前に教師が文部省指導書に基づいて適当な実験回路を使って，実験方法，実験目的を読み上げたり，黒板に書いたり等して，それを生徒が写し取る方法。そのために時間的ロスが多く，実験時間の約3分の1程を費やしてしまう。また，その日のうち，または時間内に報告書を整理し，考察まで書き上げて提出しなければならず，生徒が考えたり，本を読んで考察する時間がないために，報告書も適当に友達のを写して提出している。

● これらの実験に関して含んでいる問題

多数グループによる同一実験のために，高価な測定器が数多く必要であり，その費用も莫大である。実験回路等は職業訓練校ということもあり，生徒が回路をハンダづけするので空中配線となり，ショートしたりして，電流計を破損させたりする。同じ部品を何回となく使用するので，部品の足がとれて使えなくなる。教師の方も生徒の空中配線のために誤配線を見つけにくいなど，部品に関しての故障も多い。これに対する解決策として，回路をプラスティック板に取りつけて，各部品を差し替えるだけにしたものを作った（1板で3～4種類

の回路が組める様に）。しかし，生徒の中に心貧しき者がおり，各部品が紛失してしまうので，これには各グループ別にリーダーを決め，返納時に生徒と教師で部品の数を確認する様にしたが，それでも紛失する。中には，どこに使用するのやら測定器のツマミが紛失したり，端子なども紛失する。

グループ別の異なる実験をすれば，測定器の数が少なくてすむ，ということを進言したら，以前にそうしたが，教師が全グループの実験を把握できなかったそうだ。それで現在の方法を取っているのだそうだ。

文部省の指導書を見てみると，短大か大学１～２年かと思われる程，高度の内容です。実験書については，アメリカ，西ドイツ，オーストラリア，イスラエル等の本をそのまま翻訳したものだろうと思うが，印刷時にタイプの間違いが多く，回路が異なったりしている。教師の中には，文部省実験指導書をそのまま実験させている者がおり，実験前に計算および自分で実験していないので，生徒が理論値と実験値の大きな誤差を尋ねても，測定器の誤差だと適当に答えてごまかしている。そこで，カウンターパートに教師用の小さな実験室を作ってくれる様に言ったが，まだである（その後，これは電子科の建物の中にある物置きを整理して作った）。そうすれば，事前に問題点が分かるので，生徒に対して適切な説明が出来る。

● 測定器の修理

前にも書いたように，使用頻度の多い測定器オシロスコープ，信号発生器，電源（高圧及び低圧）等が故障して来る。修理しても，また別の所が故障で常に修理している様になる。２度以上の故障となると，各部品の値の変化とトランジスター，ＦＥＴの特性の劣下が主になっている。また，実験室ごとに管理教師がおり，その管理教師が自分以外の教師に貸し出さず，かといって見ていると使用しているようでもなく，タイ人間で問題がある。そのため同じ測定器がありながら，他の実験室の物は使用できないので，特定機種だけ使用して故障が多くなっている。

● 教育の問題点

文部省の指導に従うと，教育内容が高度なために現場教師が内容についていけないので，生徒の方もついていけない傾向にある。基礎となる物理，化学，及び数学が良く理解できておらず（教師及び生徒。ただし学士でも，大学で学んだ工学士になれば問題があまりない），よく彼ら教師が教える１～２時間前に私の所に来て「ここが良く分からないから説明してくれ」と言って説明を受けるが，実際にはかなり高度（大学程度３～４年次）な問題が含まれていたり

して，基礎的なことから説明しなければならない。時として私も分からないことが多くあるので，すぐには説明出来ないために，彼らも困ってしまうようである。

そこで，私の方も，教える日の２～３日前に本を読んで分からなければ，一応自分で考えてから尋ねるよう指導した。そうすれば，次の日に私の方も準備しておくということにしている。質問の多い教師というのは若い教師であり，年齢が高くなると全く質問してこない。彼らが教えるのは，まだ真空管であったりＰＮＰトランジスターであったりするので，若い教師と年のいった教師では，教える内容が異なっている。この辺は日本と同じであるが……。

以上のように問題がいろいろあるが，私としてもつい日本的教育方法にもっていこうとする傾向にあるので，自分なりに注意する必要がある。

4. 業務活動の内容（2）— 1年目

私の業務活動の内容は，前述のことからも分かるように，教師であり，一応学生を対象に教えることである。タイ側もそう望むのではあるが，しかしこの1年間は学生ではなく，主に科の教師を対象として教えるアドバイザー的なものと，修理（主に測定器）が，その活動となってしまった。

学生を対象とした授業は言葉のハンディもあり，全体の数パーセントであった。すでに述べたように，授業は文部省指導要領に従うために，内容に職業訓練校の内容と短大的なものがあり，その内容的な隔たりが大きく，時間的にも十分な余裕がない。時間的失敗として，ある単元を３時間で教えなければならないところを，実質９時間以上もかけて教えたようなことが数回あった。それは，言葉が不自由なために，図に書いたり，例を示して説明するために時間を費やすし，理解させようとすれば する程，そうなってしまう。そのために予定が全く狂ってしまう。

一方，測定器は誤差が大きいので，理論と実験値が合わず，種々と問題があった。

また，生徒の質も差が著しく，日本と同様に教えるのが難しい。一般にタイの学生は，人に教えてもらうのが好きな面がある。分からない所があるとすぐに質問するのは良いが，質問の前に，思考するということが若干欠けているように思える。そのために思考の発展性が見られない。

タイの学生も日本のように点数主義なために，彼ら学生はテストの成績を気にしており，テストの採点には十分気をつけるよう，心がけている。実際の失敗というのは，毎日毎日，数限りなく繰り返しているありさまで，日本にいる時

と同様である。しかし，今までの間に重大な失敗というのはしていない。

● 今後の授業手法について

各理論と平行して，測定器を用いて説明したい。（実験時間では十分に理解していないと思うので）例として，回路波形をオシロスコープなどを用いて視覚に訴えたいと思う。理論だけあって，実験のない教科に対して，各種デモンストレーターを作って見たいとも思っている（タイ人でなくとも，実際の回路に対して興味があるようだから）。しかし，実際の回路は，各種ファクターにより理論回路と異なってくるので，その製作は難しい所です。今年から来年にかけて製作したいものは，以下の通りです。

実験用測定器

(A) ハンドスコープ

低周波回路の実験で，共振回路など周波数に依存する諸特性を観測するもの。これは，OPAMPを用いた電圧制御発振回路を用いれば良く，実験ずみである。

(B) スペクトルアナライザー

80MHZ～108MHZ 帯のラジオ受信機のＯＳＣにＦＭ変調をかけたもの。

(C) 455 KHZ，10.7 MHZ の発振回路にＦＭ変調をかけたもの。

授業風景

(D) トランジスター，ＦＥＴの静特性カーブトレーサー

トランジスター，ＦＥＴ等の特性観測用，これを用いると差動アンプなどの特性の合ったもの同士を見つけるのが容易である。

(E) トランジスターを用いた送信機のデモンストレーター

この国の送信機における授業は，まだ真空管であり，教師自身もトランジスター回路について無知である。トランジスター回路を各ブロックに分けて製作したい。電波型式は，A_3，A_3J，A_3H，F_3 等，出力は500ｍＷ程のものである。ＦＭについては，ＦＭ放送局の送信機と同様，マルチプレックス方式のデモンストレーターも考えている。

(F) ファンクションジェネレーター

パルス回路の実験用。現在あるトリオの低周波発振器にある回路（積分回路）を付加するだけであるが，実験では良くいったが，実装すると回路が正常に作動せず，ということもあり，若干問題があるが可能である。

(G) ＨＦ，ＶＨＦを用いたレッヘル線の実験

アンテナ，及び伝送回路の実験で（文部省の指導要領にはない）スミスチャートを理解，使用させるもの。

(H) 学生用の電気，電子回路の演習テキスト

電気回路，電子回路では，アメリカ出版（短大用）の英語テキストがあるので，それをタイ語に翻訳して，ガリ版にて学内で印刷して安く製作したい。

(I) 各種測定器の修理マニュアルの製作

今までの各種修理内容を日誌につけているので，それをまとめてタイ語で出版すれば，文部省を通ることにより国内のすべての職業訓練校に行き渡るので，各学校において測定器の修理が容易になるであろう。国内の職業訓練校の各種測定器は，私の学校のものと同様の機種であるから，この辺は便利である。

＜実際に製作した機器＞

ⓐ １現象オシロスコープの２現象化用のアダプター

国内の職業訓練校にあるオシロスコープは，約800台。これをすべて２現象オシロスコープに交換しようとすれば，莫大な費用になる。そのために安価なこの装置をつければ，簡単な入力，出力の波形観測に便利で十分に使用できる。

ⓑ 工作加工機器

(1) プラスチックの折りまげ用ヒーター

(2) プラスチック切断器

これらは，実験回路などを入れるケースを加工するためのものである。

これら以上のものは，すべてこちらで購入できるものだけを使用したもので，特殊な部品は使用していない。

この1年間の問題として，サンワ社製のマルチテスターＥＭ－700の修理を空き時間をみてしたが，修理できたのは約４０台ある内の１台だけであった。このテスターは，タイ国内のすべての職業訓練校にあり，それらすべてが使用不能とのことなので，種々と手を尽したが，上記の結果に終わった。一応，会社からの回答（返事）では，修理はかなり難しいとのことでした。実際，こちらで購入できる差動アンプ用のＦＥＴ（２SK30Ａ－Ｏ，サンワ社では２SK30Ａ－Ｙを使用するとのことでした）は，特性にバラツキがあるために多数ＦＥＴを購入しても，特性の合ったものが少なく，合ったもの同士を実装しても，直線性が悪く，うまくいきませんでした。一応，アメリカ製のＦＥＴを実装しても同じ結果で，どうしようもなくなっている。これが今後の問題となっています。

<注：１現象オシロスコープの２現象化アダプターについての詳細については，第５号報告書を参照のこと>

5. 1年後の新学期 ― 2年目

任地に着任して，１年目でようやく，今学期正式に私の授業を受け持ち，以前のような臨時教師的なものとは違って，その教科において全責任があります。今学期の正式な教科は次の通りです。

(a) 電子回路Ⅱ　短期科の学生：週２時間（３５名）
(b) 電子応用　電子科の学生：週２時間（４０名）
(c) コンピューター技術　短期科の学生：週２時間（３０名）
(d) ラジオ修理サービス　電子科の学生：週24時間（118名）
(e) パルス工学の実習　電子科の学生：週４時間（４０名）
(f) 電子応用の実習　電子科の学生：週４時間（４０名）
合計：６教科，１週３８時間

電子科のタイ人教師は，今学期平均５３時間の授業を持っている。それから比べれば私の方は非常に少ないのですが，来学期は多分，私の方も４０時間以上になるのではないでしょうか。

このように今学期は授業に追われて，全く自由時間がなく，種々と問題があった。そのひとつとして，例の測定器の修理の件がある。学校の測定器は，実

際の耐用年数を遥かに過ぎた代物で，まるで老人の治療のようである。足腰が弱いといって足腰を強化すれば，今度は足腰に対して心臓の機能が低下しているために，逆にその心臓に負担がかかり，心臓がいかれるという次第で，また，その心臓を交換すれば，別な血管にまた負担がかかり，そして結局，血管もいかれる。気がついてみると，全て交換してしまっていたというようになりかねません。

以上のように測定器をいくら修理しても，修理しきれない。その上，今学期は授業もあるため，修理をする時間もなく，殆とんど修理に手をつけなかった。

各種測定器の使用時間を計算すると

（１日平均８時間・１年間）　$365 \times \frac{2}{3} \times 8 = 1{,}947$時間

（それを１５年間とすると）　$1{,}947 \times 15 = 29{,}200$時間

と驚くような時間数です。もし測定器がなければないなりに方法を考えるのですが，文部省の指導では「使用」となっていますので逆らえません。

ところで，授業については，なかなか予定通りには行っていなかった。生徒に分かるように教えるには時間はかかるし，私としても十分理解してない事項もあり，私自身それを理解するのに，１週間以上も前から考えることもある。そして明日教える段となり，午前２時，３時ごろやっと理解したものを，生徒にその日の午前９時ごろ教えるのですから，生徒にして見れば難しいのでしょう。別に教える時は，私の分からなかった，理解しにくい点を重点にして教えるのですが，基礎的可逆性（一見するとパラドックス的）がないために，生徒は理解しづらい。こちらの学生は，すべての事を教えてもらった後で，それと同じもので演習しないと，全く出来ないということになる。一般的に応用に欠けているようです。

今学期，教えていて思うのは，電子科の生徒に対しては私も電子科の教師と認められたようだということです。タイ人教師でさえ，半年，１年間位は生徒の方で，教師の実力を見るために，教師と認めていないようで，実際，その期間，その教師の授業は受けるが，反面，生徒が信用していない。この辺は実におもしろい所で，この電子科でさえ，12名いる教師の中で，３名程，今だに生徒に信用されていない教師がいる。ここで教えて４～５年になる教師が，です。私から見て教師のレベルが生徒同様というのもいます。彼らの授業に対して，生徒の方でも全く信用していなく，その授業が終ると，生徒が私の所とか他の教師の所に新たに聞きに来ることが良くある。私の方も授業中に，計算式を間違って教えた時などは，生徒の方から間違っているよと指摘してくれれば，生

徒の方は約90％理解していると思っている。そうでないと間違っていても，そのままでは全く理解してない結果となるので私の方も適当に間違って，生徒の反応を見るようにしている。

また，たまに生徒の私語が多い時などは，タイ人教師のように説教することがある。生徒が実習時間に間違った配線で，実験をしているのを見つけると，私が「何んで簡単な配線を間違えるんだ。頭を出しな」と言って，頭を殴るふりを何回となくやっている。実際は殴りませんが，生徒の方も心得たものでニヤッと笑って頭を下げます。その後は教室中が爆笑。このようにやっと生徒の間では教師と認められたようです。

さて，11月下旬，南部タイのスラタニーにおいて，職業訓練校の技術コンテストがあり，私の生徒（電子科）が第1位になり，1月中旬にバンコクの全国大会に出場しましたが，残念なことに予戦で見事に落ちました。実際，他の学校の生徒と比べて，技術，知識など劣ってはいませんでした。私としては優勝の可能性大とみていたのですが，運が悪かったとしか言いようがありません。ハジャイを出る時から，汽車の脱線事故等で出発は10時間近く遅れるし，ホテルに着いたら着いたで翌朝トイレの状態が良くなく，水びたしになるなど，種々おかしなことがあり，運が良くなかった，の一言です。競技中，私の生徒は，普段は落ち着いているのが，若干手が震える等，奮い立ったような所もあった。

私の方もハジャイを出る時から種々と彼にアドバイスして（汽車の中でも），ホテルに着いてからも夜遅くまで，私1人で回路のチェックの方法，動作理論等を教えていました。他に2人の教師が同行しましたが，全く生徒の方には関心がなく，生徒の方も私の方にだけ質問してくるという始末で，タイ人教師2名は適切なアドバイスが出来ませんでした。スラタニーの南部大会でも同様に，生徒が私にだけアドバイスを求めて来ます。私の方としても適切なアドバイスが出来たかどうか分かりませんが，南部大会以後，生徒の私に対する接し方がはっきりと変わったようで，ある程度以上の問題に関して，私に質問するというような形になってきた。私も電子科の学生（2年生，及び3年生）に教えるのが楽しい。何故なら，私のヘタなタイ語での説明でも理解してくれるので。

また，今学期驚いたのは，中間テストにトランジスターの良，不良のチェックの実技試験をした時に（テスターを用いてトランジスターのチェックをする），以前はタイ人が，トランジスターなど小型のものをチェックする場合，それらを机の上に置いてテスター棒でトランジスターの足を押えるか，指でテスター

棒とトランジスターの足を押えて測定していたのが，今回は私と同じ方法（左手にトランジスター等を持ち，右手にテスター棒２本を箸で物をつかむ様にして，トランジスター等の足をつかんで測定する方法）でチェックしていました。生徒の方は，以前から私のチェックの方法を見ていて，それをまねたようですが，私は別にそうしろとは言ったことがないのに，生徒自身がその方法でチェックするようになったそうです。全体の約８０％位が，私のチェック方法を用いていたようで，私としても嬉しくなってきました。

生徒にしてみれば，私と同様の方法をとれば私のようになれると思っているようで，私の全てが正しいと思っている生徒もいる（この辺は若干問題があるようですが）。

とにかく生徒の間で，私が教師として認められたのが嬉しいです。

6. 教師として認められての新学期

新学期は新入生を迎えて，５月１６日よりスタート。わが電子科にも，新教師３名が増え，計１４名になってしまった。そのために，私の受け持つ教科も今回は少なく，５教科。そのうち，私の主任教科は２つだけで，前学期より少なくなっている。教科は，下記のようになっている。

1. 基礎コンピュータープログラム　：電子科，３０名（週3時間）
2. 電子回路設計　：電子科，３０名（週6時間）
3. 基礎電子部品　：電子科，120名（週9時間）
4. 基礎計測全般　：自動車整備科，８０名（週6時間）
5. マイクロプロセッサー　：電子科，３０名（週4時間）

上記１，２が私の主任教科となって，３，４，５は他の教師が理論を教え，私が実習で彼と共に生徒にアドバイスする。あるいは，その教師が分からないと，教師に代わって私が教えるときもある。

１の教科については，電子科でアップルⅡというコンピューターを１台購入したので，それを使って基礎プログラムを教えている。

私は以前 FORTRAN については，習ったことはありましたが，以前は全くコンピューターに興味がなく，コンピューターに関して，今年２月ごろから独学しはじめ，ソンクラー大学の山田隊員のご好意により，彼が日本から持って来たNECPC6001 を借用して，自分の家で夜でもプログラム出来るようになり，大変感謝している次第です。

以前，コンピューターに興味がなかったのが，今では一応，実用化できるプログラムを，毎日考えているありさまです。今まで作ったプログラムを下記に示します（日本人から見れば全く使用に耐えないものかもしれませんが，私としては約3カ月，BASICのイロハから始めて作ったものです）。

① 共振回路の各点の電圧，電流，リアクタンス，インピーダンスなど，各周波数での計算値のディスプレイ（直列，並列等，応用化）。

② 共振回路の特性のグラフィック（①の応用）。

③ リサージュ図形のグラフィック（タイ人は，なかなかリサージュ図形を理解出来ない）。

④ 生徒の成績の算出（T－SCOREと呼ばれるもので偏差値を用いたもの。このプログラムに約1カ月）。

以上のプログラム，特に④のプログラムは，学期末の点数つけに便利なように作りました。これにより，点数つけの時間が早く出来る。

話を私の教科に戻そう。電子回路設計は若干生徒に問題があり，なかなか難しい。基礎コンピュータープログラム（電子科）のグループは，ほとんどの生徒が，電気関係に興味がないために，いくら教えても，少数の生徒しか興味を示さない。

それで，今回一応回路設計とはどうするのか，また，回路定数の決定はどうすべきか，定電圧回路を各自，計算設計させた。しかし，なかなか使えそうな回路には，なりそうもなかったので，もう一度，設計の重点を教えた。定電圧回路の設計が終わった所で，今度は生徒が，自分自身で興味ある回路（なるべく部品数の少ない回路）をさがして，それで小グループに分かれて，その回路について徹底的に実習させ，レポートを書かせようかと思っている。そうすれば，彼らなりに自信がつくのではないかと思う。特に基本的応用が出来れば，独学も出来るだろうから……。

生徒の出来は，やはり中国系の学生の方が，タイ人と比較した場合，若干良いようです。しかし，こちらの生徒は，電子回路というと，すぐアンプそれも100 W，200 Wのアンプを作りたがって，ことあるごとに回路はアンプだけではない，ということを教えていますが，生徒の方は，短絡的にすぐ出来上がるものばかり考えて，応用する楽しみを持っていない。

3，4の教科については，基本的なもので，自分としては勉強する程のもの

ではなく，実習時間の生徒の質問に答えることができる。

５の教科は，１，２の教科同様，今学期からの新しい教科で，私もマイコンのアセンブラ言語という機械語について，全く勉強したことがないので，ここ１週間，毎日，毎日，マイコンの本を読んで，少しずつですが理解して来た所です。この教科は，ハードウエアーなもので，ある程度ＣＰＵ（マイクロプロセッサー）の動作なども知っていないと，難しそうで，種々とやっています。後１カ月程で，ものに出来るかも知れません。ワンボードマイコンを使用したシーケンスコントロールでも，などと考えているところです。このように，今学期新しく増えた教科を見ると，自分の考えている以上のことまで，教える必要が出て来たようです。

私がこの職場に入ってからの効果が，出たかというと，あまり目立った効果というのは，あまりないのか，気づかないというか，それ程でもない。特に歳のいっている教師に関しては全くない。しかし，若い連中は，良く勉強（新しい知識に関して）するようになって来ている。タイでは，ここ２～３年程，回路がアナログからデジタルに変わる過渡期だろうと思われるが，そこでの頭の切り換えが出来ずにいる連中が多くおり，ここにも問題がある。

横田隊員の報告書を読んで

向井　政昭

横田隊員のレポートを読んでまず最初に感じたのは，イギリスの哲学者フランシス・ベーコンの「知は力なり」という言葉である。

横田隊員がタイ国のHaadyai Technical College に赴任し，最初に測定器の修理を手がけ，これがきっかけとなって周囲の人達に実力を認められ，次第に信頼されるようになったという記事を見たとき，彼に贈る言葉としてこれ程適切なものはないのではないかと思った。

数年前私は海外協力隊のご厚意で，フィリピンとマレイシアの職業訓練校を訪れる機会を得たが，その際同君が指摘しているように，故障している測定器が大変多いことに気がついた。

このようなことから，同君が赴任早々測定器の修理に取り組み，しばらくの間これに忙殺されることになったという点については充分理解できる。

おそらく横田隊員は，赴任先でこのような仕事が待ち構えているとは，夢にも思わなかったに違いない。しかし，同君がこの事態に的確に対処できたということは，同君の優れた専門知識と幅広い応用力によるところが大きいと思う。

協力隊員が派遣される国々は，電子機器関係の仕事一つを取ってみても，日本とは大分事情が異なり，一寸した補修部品さえも入手困難なことが多い。そのため，このような所で故障機器を修理するには，代替品で間に合わせるとか，故障機器の何台かを犠牲にしてその部品を使うといった柔軟な考えが必要である。この点横田隊員はその実力をいかんなく発揮し，恵まれない条件下で現地の期待に応えたのではないかと感じている。

このレポートによれば，タイ国には，現在真空管式の白黒テレビからＩＣ式のカラーテレビ，更に最新のホームＶＴＲまで普及しているとのことである。このことは，電子機器関係の生徒を指導する上で，極めて広範囲な技術知識が必要であることを意味する。

ところで現在，日本で真空管を使ったテレビやラジオにお目にかかるチャンスはあるだろうか？それどころか，真空管さえ知らない人が大部分であるに違いない。このような過去の技術と最先端技術が混在する中で，職業訓練校の生徒や教師を指導しなければならない同君の苦労は，並大抵のものではないと思

う。

職業訓練校と言えば，実験がつきものである。しかしながら，これにも悩みが多いらしい。例えば，測定器の精度や台数の問題，実験の進め方など……。とくにタイ国の学校では，1クラスを4～5名のグループに分け，同一テーマの実験を行なう関係上，数多くの高価な測定器を必要とのことである。

この方法は，画一的な指導ができる反面，実験機器の整備や管理が大変である。

このような中で，同君は実験中のトラブルを避けるためにプラグイン式の実験装置を作るなど，いろいろ工夫されているとのことであり，大変心強く感じた。

それにつけても，同君が指摘しているように，グループ別に違った実験を交代しながら行なうようにすれば，測定器の数も少なくて済むと思うのであるが，やはり実現困難なのだろうか？再考の余地があるように思う。

話は変わるが，実験を円滑に進めるためには，事前に指導者が実験結果を把握しておく必要がある。このような点から，予備実験は必須のものと思う。円滑な実験によって浮いた時間を，検討や考察の時間として生徒に与えてほしい。

指導の中における実験の位置づけについてはいろいろな考え方があろうが，私は同君の意見に賛成である。すなわち理論と平行して実験を行ない，黒板とチョークだけでは理解できなかった部分を補う，という考え方がよいと思う。

横田隊員は今後の授業の進め方として，理論と平行して測定器を用いての説明を取り入れるべく，スペクトルアナライザーやトランジスターの静特性カーブトレーサー等の製作を予定している。

一方，職場における測定器の整備状況を憂慮して，各種測定器の修理マニュアルの作成なども計画している。特に修理マニュアルについては，Haadyai Technical College のみにとどまらず，その利用対象をタイ国内の職業訓練校に置くなど，並々ならぬ意欲を見せている。タイ国内の職業訓練校の多くが，多数の故障測定器をかかえていることを考えたとき，この計画は当を得たものと思う。

今後の同君の活躍を期待する。

（協力隊技術専門委員）

技術職業教育大学での溶接指導

職　種　溶接
氏　名　飯野　一男
配属先　技術職業教育大学
　　チェンマイ校

飯野隊員の略歴

生年月日	昭和24年1月1日
出身地	群馬県
学　歴	上智大学文学部卒
派遣期間	57年3月～派遣中

1. 受け入れ体制及び職場事情

私が仕事をしている学校の機構については，次のとおり。

(A)学科について

様々な学科があるが，それは，電気科，デザイン科，機械科，自動車科，建築科，商業科，職業科の教師の養成科，等々である。私のいる溶接部門は，機械科に所属している。これらの学科の中で学生が最も多いのは，商業科であり，女子が大多数を占めている。

どの学科も基礎的な知識は当然教えており，数学，社会，化学，物理，英語，等々で，その上で専門の知識が加わっている。それ故に学科の構成と内容は，日本の高専とほとんど変わらない。と言っても，全ての学科が5年制というわけではない。商業科の一部と，デザイン科の一部は3年制である。その他は5年制である。例えば，この学校を出て大学の3年に進学する事は可能であるし，無論3年でやめて大学に進んで行っても良い。

ところで，どの学科も様々な設備を持ち，なかなかの実習場を抱えているが，道具にしても機械にしても旧式の物が多く，日本の工業系の学校とは質的に異なっていると言える。新しい物に代えるにしても，予算の不足という，この国では当たり前の状況がある。とにかく，諸学科の充実という課題は，次の事柄にかかっている。

つまり，実習場の改善，教師の無気力の除去，学生の質の向上，などである。これらが改善されるならば，こうした学校がこの国の中で果たす役割は大きいと言って良いが，実状はまだまだ，と言える。

(B)職員について

この学校には，200人程の教員がいる。日本と同様，校長，学科長，教員といった構成になっており，無論，教員は大学で学んだ者達ばかりであり，特に5人に1人の割合で外国で学んだ経験がある。日本，ドイツ，イギリスなどが受け入れている。また，事務局があって，相当数の人員が働いている。それ故，学校内に働く人員は正確にはわからぬが，300人程度であると私は考えている。

(C)学校の予算について

これに関しては全くわからないと言ってよい。学校全体の年間予算がいくらなのか，学科別の予算がいくらなのか，一緒に働いている者に質問しても，返ってくる答えは一様ではない。私が思うに，教師達も知らないのだと思う。

(D)学生について

今，私が働いている学校には，3,000人程の学生が学んでいる。そうして，学生の半数は女子である。技術関係の学科であっても，相当数の女子が学んでいる。学生のほとんどは，こと却ち，チェンマイ県の出身者であるが，中には遠くバンコクからやって来ている学生もいる。であるから，学校の付近に下宿をして通っている者がかなりいる。休みの日に，そういう学生達は家に帰って行くのである。

ところで，チェンマイは交通の便が悪いという理由から，学生達の多くがオートバイを使って通学している。

(4)この学校に対する私の印象

この学校へやって来て3カ月が過ぎようとしている。校長を始め多くの教師を知ったが，正直に言って私の印象，つまり学校スタッフに関する印象は余り良くない。教師の多くは教育についての展望を持たない場合が多く，専門の知識に関しても十分とは言えない。欠点は次の如く表現できる。

(1)教師と教師との間に連帯感が無い

(2)授業時間が十分に守られない

(3)機材や物品の不足を当然の如く考えている

(4)学生と教師が共に学ぶという意識がない

(5)無気力がそれ故目立って感じられる

無論，日本人の教師と異なった状況下で育ち，教師となったのであるから，日本人の教師と彼らを一様な目でもって，みることは正しくはないが，以上の事柄はしかし，彼らの持つ欠点として厳然として存在する。彼らの無気力は，思想の欠如と月給の安さが大きく原因している。

当然，優れた点も持ち合わせている。それは，

(1)自分の事は自分で行なうということ

(2)いざという時の実行力は大いに認められるということ

(3)相手の優れた点を認め，それを了解して行くという態度があること

などである。無論，個々の教師によって，上記の事柄には差異が見られるわけであるが，この3点の方向性は相当程度認められると言って良い。

次に学生に関してであるが，一応15歳から20歳迄が中心であるが，20歳を過ぎた者もかなりおり，日本の高専とは幾分異なる。何が優れているか，ということは難しい問題であるが，学力の点から言えば，日本人の学生とほとんど変わる所はなく，頭もかなり良いと言って良い。しかし，教師の教え方と時間の使い方に問題があり，彼らが学ぶ知識は実際の所，十分ではない。また，日本

人の学生程にはいわゆる真面目ではない。努力する態度に欠ける訳であるが，それはしかし，教師のやり方ひとつで修正可能な事柄であり，学生を責めるわけにはいかない。

学校では高度の知識を教えるが，それが現実に役立っていくという事実が乏しい。知識は体系的なつながりを欠いており，学生達の頭の中では切れ切れの知識となっている。

結論として，教える態度と学ぶ態度に問題を残していると言わざるを得ない。

2. 協力活動の開始

6月1日，新しい学期が始まり，私は仕事を始めることになったわけであるが，まず授業の時間表に従って，学生の指導にあたった。

朝の8時に授業が開始される。教室へ行って授業に参加するべく，毎日仲間の教師と共に授業に出た。タイ語がまだ満足に出来ぬので，初めのうちは英語で黒板に書いたが，最近はタイ語を使うようにしている。授業時間の半分位を私は貰って，私のプランに従って授業を進めた。何が課題であるかは，仲間と決定していった。時間は一様でないが，朝の10時迄に教室の授業は終わるのが常であり，その後，実習が開始される。私は実習に戻って，その日の課題を説明し，指示を与える。説明と指示のやり方は私にまかされており，また，評価の仕方も私の考えによってなされている。

要するに，協力活動の開始にあたって，難しい問題はほとんど何もなかったと言ってよい。学校は私を，一般の教師と同様に見，またそのように取り扱ったので，これという意識のギャップはなかった。私は主に電気溶接の部門をまかされ，今の所，溶接に関する説明及び実習の方法は，私の考えに従ってなされている。無論承認を受けた上で。

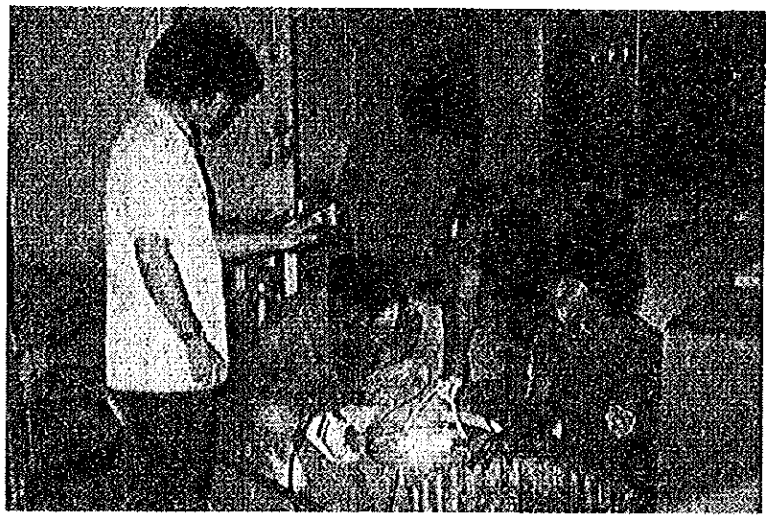
まず，溶接理論に関して，説明の時に学生の知識を調べるべく，なるべく彼らの口で答えさせるようにし，この学科の学生の程度を調べ，同時に，実際の溶接力を実習の中で確かめることから始めた。その結果，次の事柄について，改善が必要とされることが判明した。それは即ち，

(1)授業時間の使い方に問題があり，学生達が集中して学ぶことがかなわぬことから，時間の使い方を考え直すこと

(2)評価の仕方を変えること。結果主義を改善すること

(3)知識の再確認を授業時間の中で図っていくこと

(4)安全教育を与えること



授業風景

などが考えられる。つまり改善すべき点であると考えられる。

今述べたように，協力活動の開始にあたっては，殆とんど何もとまどう事柄は生じなかった。ただ言葉の問題を除いて。例えば，何かについて説明する時は，始めにノートに説明したいと思う事を書いておき，それを書いて説明するようにしていく時，言葉の問題は幾分か解決されるが，やはり対話形式の説明が大切であることに変わりはない。

どこの学校にも諸々の問題があることはわかっていたし，タイの学校が持っている悩みも，日本の学校と余り変わることはない。今学期はいろいろと問題を見，来学期に改善出来る所はしたいと思っている。

溶接の理論と実際を，私に与えられた時間の中で，幾分なりとも軌道に乗せたいと思っているが，この３カ月間の仕事の中で，その方向性が的確になったと考えている。つまり，

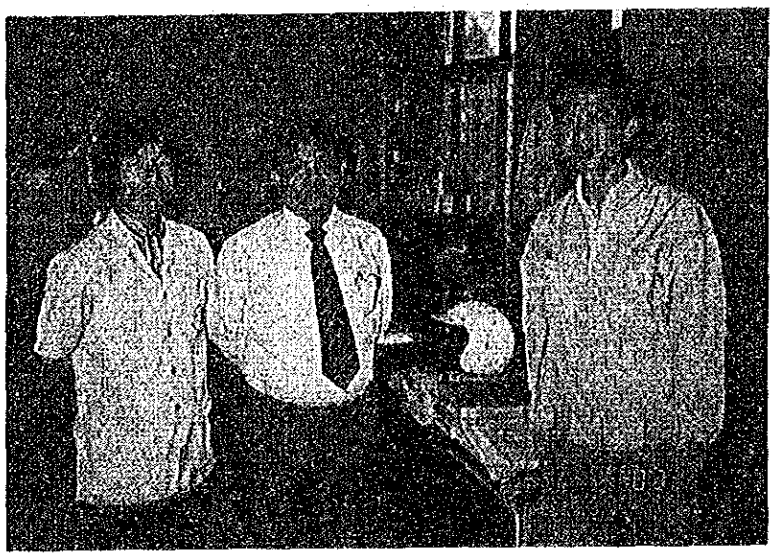
(1)教材の不足

(2)学生数の多さ

(3)時間の使い方のアンバランス

(4)予算の少なさ

という事実は決定的であり，何かをなすためには，まずこの事実を認めた上で



溶接科の先生と筆者（左）

行なう必要がある。溶接科にとって，これらの事実は大きなマイナスである。

とにかく，6月1日から今日まで，私は電気溶接に関して学生を指導して来たが，言葉が自由に使えるようになるまでには，無論のことまだ時間が要るし，説明の仕方にしても，学生達からすれば妙なものに映るかも知れないが，何にしても，早く言葉をものにしなければならない。そうした状況のもとで，改善出来る所を幾分なりとも実現していく方向を取りたく思っている。

3. 学校外での生活

チェンマイは日本で言えば，田舎の中心都市といった所で，人口ははっきりとは確認されていない。学校は街の中心からかなり離れており，静かな環境の中にある。私は自転車で学校へ通うのだが，それも10分程度で，無論苦にはならぬ時間である。

土曜及び日曜は休みであり，自分の時間として使うことがかなう。一緒にやって来た赤嶺君と，夕食の時は共にすることが多い。チェンマイの街へ出掛けたりもする。また，仲間の教師と行動を共にすることもある。休みの日に特別に計画を立てて，何かをなすといったことはしないが，日本語の本を読む場合

が多い。

ところで，放課後，学校の一角を使って柔道を教えているが，なかなか楽しいものである。学生だけでなく，学校の近くの子供達が，何人か来て練習をしていくので，柔道の時間も大切な時間だと考えている。

現在，チェンマイでの協力隊員は，赤嶺君と私の２人だけであり，様々な面で協力し合っている。ここチェンマイでは，チェンマイ語というつまり方言があるが，食堂のおばさんからそれを教えて貰うのが楽しい。といっても，やはりパンコクの言葉が中心である。すぐ近くにチェンマイ大学があるが，そこで日本人が日本語を教えているが，学生が多過ぎて大変であると聞いている。このチェンマイの中で，日本語を自由に話せる人つまりタイ人は，今の所私は知らない。

日本人つまりチェンマイに住む日本人に関しては，同様にほとんど知らない。ほんの２，３人の人と話をするだけで，実際の所，私の関心の及ぶ所ではない。

最後に，次の事を述べておきたいと思う。この国タイは自国を開発させていく能力，換言すれば，自力で開発が可能な国だが，タイ人も外国人も，この国が過小評価されていることに気が付かないでいる。それが幾分残念であるのだが。

4. 第１学期を終わって

６月１日から10月６日迄が第１学期であった。また，第２学期は，11月１日から来年の２月いっぱい迄である。今日は，第１学期が終わったので，それをふり返って見たく思う。

とにかく最大の問題は，それは予算の欠如という点にある。最近になってわかった事だが，私がいる溶接科では，１学期当たりの予算が，日本円で言えば30万円である。これではいかんともし難い。来学期つまり11月からは，合金の溶接に関して教えることになっているが，材料が私の希望通りに入手出来るかどうか，心配している所である。

第１学期は，軟鋼の溶接に関して指導して来たが，幾つか気付いた点について述べてみると，次のとおりである。

まず，実習時間が長すぎるという点である。実習時間が長いので，学生達の集中力が散って，なかなか思うような成果があげにくい。タイ人の性質としても，長時間の集中的な実習は好ましくないと感じざるを得ない。

次に，特に実習中の学生が時間を無駄に使っていても，教師が注意すること

がない点である。学生達は，実習の時間を勝手に使う場合が，しばしばあるが，誰も何も言わない。

第１学期の前半は，言葉が満足に出来ない理由から，私はある程度大目に見ていた。溶接に関する知識不足，実習期間中の集中力のなさ，時間にルーズであることなどについて，しばらくは様子をみていくことにしていた。また，他の教師の教え方のまずさについても同様の態度を取った。

そして後半，学生を授業に集中させるために，幾分厳しいやり方を取ることにし，それを実行した。

(1)授業に遅れた者は，授業に参加させないようにした

(2)説明を聞いてない者は，ただちに授業参加を禁じた

(3)道具や機械をきちんと取り扱わない者は，同様に授業参加を禁じた

(4)知識が欠如している者，また，結果は悪くても常に努力している者に対しては，それぞれに合致した教え方をねった

(5)結果は重要視しないようにした。学ぼうとする真面目な学生に対しては，結果にこだわらず，高い評価を与えた

(6)理論については，なるべく私が質問し，学生に黒板の前でしゃべって貰うべく，１人１人に説明の時間を与えた

(7)実習中は，１人１人指導する方法を採った

さて，これらの私の方法について，ある学生はおもしろくないといった態度を見せ，また，ある学生は理解し，努力するようになった。とにかく，説明だけは十分にするようにし，誤解を避けるように心掛けたが，無論，私の現在の語学力（タイ語に関しての）では，完全に私の気持ちを伝えることは難しい。従って，出来る限り書いて説明するようにしているが，これは口で言うより結果は良いと思う。

ところで，教師つまり周りのタイ人の教師達の教え方であるが，日本の教師とは大分異なっている。溶接科の教師に関して言えば，基礎理論が欠如しており，実習においても，学生の手本となるような溶接は出来ない。これは実に驚くべきことである。

もちろん，教師として働いているのであるから，高等な溶接理論は知識として持ち合わせている。といって基礎的な理論は，最近になってわかって来たのだが，十分に持っていると言い難いのである。彼らは，高等な理論にはとびつくが，最も重要な基礎知識については，それを等閑している現状がある。見過ごすべからざるを見過ごし，未熟なる学生にとって何が大切であるのか十分に認

識されないままでいる。

また，溶接を実際に満足に出来ぬという実に困った現状があり，これは，しかし私にとって気が重い事実であるが，どうしようもない。人にものを教える者は，理論と実際を学ぶ者の前で，実践して見せなければならない。しかしそれが出来ぬ現状は，なかなか直すことがかなわない。説明だけでは不十分であるのが，溶接という技術であるが，それが十分に認識されていないのが事実といえる。

ところで，私のカウンターパートは，現在30歳の最も溶接科の中で若い教師であり，いろいろと私に協力してくれ，思うに，この学校の教師達の中では最もすぐれた教師と言って良い。

とにかく，私がこの学校で協力活動をする上で，もっとも頼りになる人間は，校長とカウンターパートの２人であると，この一学期を通じて知るようになった。校長は厳しい所は厳しいが，私の方針をよく理解してくれ，現在，私は彼に満足しており，同時に，これから先，カウンターパートが溶接科の実力ある教師になるだろうと，そのように考え，彼にも私はかなり満足している現状である。溶接科の中で，教師らしいタイ人といえば，カウンターパートぐらいであろうと思われてならぬが，彼と協力して，２学期もやっていくつもりである。

もうすぐ始まる２学期からは，毎回テストを行なっていくつもりである。また，時間を守らぬ者，努力しない者，そういう者達は，授業に参加させない。無論点数もやることはない。このことは，校長と話し合い，すでに合意している事であるので，今後も変えない。

ここは学校である。１人でも努力する者がいれば，私は当然のことながら，義務を果たさねばならないが，99人のその他をどうするか，これもまた教師の義務であり，少なくともこの学校は，その他，つまり99人の学校である。それ故，言ってみればタイの典型的な学校となっているわけである。

最後に，この学校で私が最も好む点は，日本の学校の如く，諸々のやっかいな規則がないことである。例えば，学生を指導し，教え込む事は教師の自由意志に従ってなされる，という点である。自ら計画し，最も重要と思われる事を教える事がかなう，という点である。

時間に追われることもなく，最後迄教え込む事がかなう所は，実に心持ちが良い。時間に追われぬという事は，のんびりしている，という事では決してない。教えるべきものを，上からの命令ではなく，自分で選択できることがかな

う。これで予算が十分にあれば，申し分ないのだが，と常に思う。

5. 1年間をふり返って

私の仕事場の事情について書き述べてみたく思う。

溶接とは何か，これを学校に来る生徒に教えるのが，私の役目即ち，私の日常の仕事である。もっと実際に即して言えば，つまり，

(1)溶接に関する諸々の知識を説明する

(2)説明した事を実習によって体験させる

(3)溶接結果に関して検討させる

という事になる。この1年間，このような考え方によって，私なりに仕事をして来たが，これから幾分この1年間の仕事の結果について反省してみたく思う。

(1)について

私が仕事をしている学校は5年制で，ある学科には中学校を出てやって来る者もあるし，またある学科には，工業高校で3年間勉強した者がやって来て，再び2年間学ぶという状況である。溶接に関しては，工業高校を出た者が入学して来るので，18から20歳の人が基本的な年齢であるが，中には20歳を越えた人もいる。とにかく，彼らはすでに3年間ばかり高校で学んで来たわけであるから，基礎知識は持っている筈だが，実際はほとんど知ってはいないという状況であり，これは全くの事実である。就中合金の溶接に関しては，理論も実際も殆とんど知らない状況である。

それ故，可能な限り，溶接用語と金属の性質に関して説明することにしたが，初めの学期は言葉の，つまりタイ語の専門用語に慣れず，無論私の説明は十分ではなかった。そこで後学期からは，なるべく黒板に書いて説明するようにし，時々テストをやって理解度を調べるようにしたが，テストの結果からすると，私の説明は50％位が理解された程で，目標にはかなり遠かったと，そう認めざるを得ない。結局において，私の説明の仕方が満足なものではなかったと，そう言うべきだと感じている。

従って，来学期からは，説明にもっと時間をかけて，何を知らねばならないか，それを説明して行くしか方法がないわけだが，もっと生徒達に思考させる方法を取って行きたく考えている。

(2)について

実習は最も重要な時間であるが，この1年をふり返ってみるとき，次の事がやはり問題として浮かびあがって来る。

a．材料がとにかく不足している
b．溶接機が不足している
c．生徒の数が多過ぎる
d．実習の方法が十分に研究されていない
e．タイ人の教師は実習を重要視しない
等々である。

実際問題，溶接というのは経験によって，自らが学び取る技術技能であって，口で言ってすぐわかる性質のものではない。自分で経験して体得すべき性質のものである。それ故，実習は最も大切な位置を占めるべき時間である。自らの体験が全ての知識に優る，というわけである。

ところが，材料が不足し，計画を立てても，その通りに運ばない。生徒の数が多くて，全ての実習課題を実習させる事がかなわない，という状況が生じて来て，計画をどこかで変えざるを得ないという事になって，とにかくこれを，この状況をこれからどうするかが，最も重要なテーマである。

やはり，実習方法について考え直す必要があると感じているし，また，どうしても変えねばならぬと考えているが，タイ人の教師は実習というものの重要さが十分に理解できてないようで，いろいろと問題が生じてくる。

とにかく，第一に，多くの材料に関して生徒に経験させるということが希望であるが，これが十分に実行出来ぬとなっている現状からして，中味のある実習をさせて行く，という事しかないと思う。そのためには，先ず生徒達の考えたテーマつまり実習課題を集中的にやって行き，彼らの興味あるテーマを深く掘り下げて行くしかないと，こう考えている。彼らのテーマに自分の計画を合わせて投入して行くことが，最も良いと思っているが，ここにおいても最低限の材料は確保せねばならぬが，現地で求められる物はこれから現地で求めて行きたく考えている。材料が十分でない時，学校も生徒もその事を知悉している場合，生徒が何を実習したいと考えているのか，それを主体に取り上げて行くのが良いと思っている。

(3)について

言ってみれば，現在の所，"溶接のやりっぱなし"である。溶接をしたのは良いが，その結果が十分なのか十分でないのか，わからないということである。我々はとにかく溶接結果を知らねばならない。しかるに，調べるための道具なり機械がない。これは決定的に改善すべき事である。

外部の欠陥は，我々の目によって十分調べることが出来るが，内部の欠陥に

関してはどうしても試験するための機械が要る。目で調べるだけでは十分ではない。仮に，我々の学校が"曲げ試験機"を所有しているとしたら，我々の授業はかなりレベルアップが出来ることになる。溶接の授業は，溶接させるだけでなく，溶接の結果を調べなければ1人前の授業とは言い難い。

それ故，こういう実状であるから，この1年は"外視検査"のみに終始して来て，満足な調査がかなわなかった。だから(3)については，どうしても機械が欲しいと考えている。この点については，この1年は理論のみであったと言える。

基本的なことは以上である。

反省点として，

a．説明が少なかったということ

b．時間の使い方が一定していなかったということ

c．溶接結果を十分に検討出来なかったということ

d．自分の計画をタイ人の教師に十分理解させなかったということ

等々がある。

いろいろと考えてみて，またこの1年をふり返ってみて，とにかく2年では十分ではない，という感じが強くしている。一定の授業態勢，つまり溶接部門にふさわしい整った授業を完成させるためには，少なくとも3年は必要である。

今，学校もそれなりに努力をしているが，まだまだ充実には程遠い。これから何年かかるのかわからぬが，とにかく一定のレベルに生徒が達するような授業方法を発見しなければならない。それ故，私としては，幾分なりとも道具なり機械なりを備え，授業がスムーズに出来るようにしたいと思っている。

私の希望としては，ある程度のレベルになる迄，仕事を続けたく考えており，1年間の延長を認めて貰うしかないと考えている。とにかく，3年の間に授業態勢を充実させたいと思っている。

また，"曲げ試験機"をなんとしてでも手に入れたいと考えている。これがないと，授業の意味が半減してしまうからである。

6. 夏休み，そして新学期

夏休みが5月の末日迄あって，この6月から新しい学期が開始された。それ故，今回は，夏休み中の行動と始まって間もない新学期の事について，幾分述べてみたく思う。

(1)夏休みの行動について

夏休みは3月上旬から始まって，6月に入って授業つまり新学期が開始されたわけであるが，3月中は教科書作りであっという間に時間が過ぎて行った。

新しい学期から4年生を世話する事になっているので，なんといっても新しい授業プランが必要であり，それは何を基本にして考えるべきか，という点でいろいろと難しい問題があった。

即ち，これ迄の1年間の活動の中で，次の事が的確になっていたからである。

(A)学生は，工高で3年間学習して来ているにもかかわらず，彼らが持つ基礎知識はきわめてレベルが低いということ

(B)特に実習の場合，材料が不足して計画通りの実習が適わなかったということ

(C)授業時間が正確に守られて行かないということ

この1年間の学校生活で，上述した事が明らかになったので，新学期の計画書はこれら諸点を注意しながら作って行った。それは，次のような計画であった。つまり，

(A)実習時間を前よりも短くすること。これ迄，実習時間がひどく長く，学生は精神的に実習に集中することが，タイ人の性質からいって出来ないので，短い時間の中で集中して実習することがかなうように，新学期からは思い切って実習時間を短くした

(B)当然それ故，理論を教える時間を長く取った。学生の知識は全く不十分なので，基礎知識を学ぶ時間が多く要求されざるを得なかったため，これ迄の2倍の時間を理論のための授業に当てた

(C)溶接結果を調べる時間を設け，学生に各々の実力を知ってもらうようにした

従って，6月からの授業は次のようになっている。

基礎知識の学習
↓
実習
↓
溶接結果についての調査

} 合計で6時間

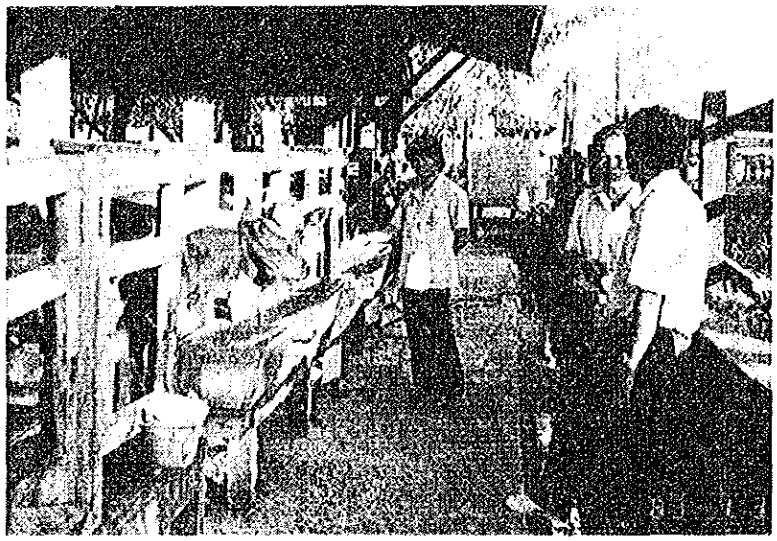
次に教科書についてであるが，これについては，自分が最も重要であると考える知識を取り上げて，それを本にして生徒に配って授業で用いることとした。3月いっぱい，計画書と教科書作りで時間を過ごした。

次に，4月であるが，中旬に入学試験があったので，上旬は他の先生と協力してその用意で時間を過ごした。それ故，4月の入学試験が13日に終わって，一

応私の夏休み中の仕事は終了したことになった。また，夏休み中に日本語を教える事になっていたので，夏休みに入ってから日本語の授業を１日に２時間程持って，なんとかやれる所まで教えたが，あまり他の人に役立ったとは思われない。

さらに，５月には１週間ばかり，他の協力隊員と共にコーンケン地方へ旅に出て，やっと夏休みらしい時間がとれた思いであった。

以上が今回の夏休みである。



近くの同僚隊員を訪ねた筆者

次に，この６月から新学期が始まったわけだが，今学期から新人生を担当する事となった。１週間ばかり，学生の様子つまり彼らの学力やらまたやる気やら様子を見ていたが，昨年と同様あまり状態は良くない。つまり，

(A)学力の欠如

(B)向学心の欠如

(C)時間に対するルーズさ

などがやはり目に入って来た。従ってこれを改善するためには，

(A)知識の向上を図ること，つまり理論の拡充を図るために，授業時間を長くし，諸器具を使用する

(B)自主的に課題を選択させ，学生の向学心を図る
(C)授業及び実習時間は厳しく守らせること
など，とにかく基本の所でいろいろと力を入れて改善するしかない。今の所，自分の計画通りになんとか授業は進めているが，常に問題が発生するので，授業ペースは速めることにしている。

これからの1年は昨年より重要であるが，なんと言っても2年間はひどく短い。それ故，この国ののんびりした学校制度の中で，幾分なりとも成果のある学生のための授業には，3年は必要と考えている。

この国の制度の中に入って，ある程度の存在感を所有するためには，なんと言っても10年は必要と思われる。と言って，我々が10年ここに留まる事は許されないであろうし，それ故，3年はどうしても確保したい時間である。日常の実践の中でタイ人の学生の意識を変えて行く事が，我々の教える知識よりも重要な事と思われる。

学生の中には，日本人のように向学心のある者もいる。無論ない者もいる。ただ毎日の授業をこなして行くだけでは，ほとんど意味がない。そこに必要なのは，学生が学生としての自覚を持ちうる授業が出来るかどうか，という事であって，知識なり技術なりの"切り売り"は何の意味もない。この国の人々が望む物は，なんと言っても"人間の誠実さ"である。この国の人々にそれが欠如しているが故に，それを彼らは望んでいる。

とにかくこれから1年を自分の計画に従って，どこまでやって行けるかが課題である。

飯野隊員の報告書を読んで

三上　博

はじめ

飯野一男隊員の報告を読んだ感じを述べることとするが，ここで申しておきたいことは，今まで幾度ともなく派遣隊員から，方々の国々からの報告書を読んでいるが，その都度派遣隊員の選考の難しさ，責任の重さを感じていたことをも附加して述べてみることとする。

ただし，筆者はこれまで数回にわたり先進欧米諸国を視察した経験はあるが，青年海外協力隊の主に関係する諸国には未だ一度も視察する機会もなく，ただこれら諸国から来た研修生の訓練経験を通じて得た感覚，知識によって生じた想像的観念を基礎としたものであるので，あるいは実情に則さないこともあるやも知れない点に対しては御容赦願いたい。

1. 計画性に関して

海外協力隊の新派遣の国，あるいは今まで協力し，すでに国情を充分知っている国であって，新設された訓練所はそんなに多くあるはずはなく，ある程度の伝統と経験ある先輩の努力が連綿として継続されているはずである。この原則から報告書を見ると，奇異の感を常にいだくのである。

それは，今まで報告書で共通に感ぜられることは，今までの伝統あるいは先輩の苦心業績が取り継がれていない感じのものが多い（※飯野隊員の場合は，新規派遣である）。訓練は統一せる計画のもとに，毎年毎年繰り返し，改良を加えられて始めて効を奏するものである。何となく第3者が読むと，毎年毎年，あるいは派遣指導員が変わる毎に教育方式が変わるように思われ，教育がぼつぼつ細断され，永年の効果が表れない感じがする。

これは，派遣隊員の自己業績の誇大のための自然現象であるかも知れないが，歴史の継続拡大となるように行動することを望むものである。青年海外協力隊と各国の訓練所との間に一定の方針，計画の基礎確立の線に沿って活動改善され，次々と申し送りが厳格に行なわれることを望むものである。

これらに関して2，3例をあげるとつぎの通りである。

(a) 国情，言語

国情に精通することは，最も大切な必要条件であることは言うまでもない。

この件に関連して大なる役割を果たすことに役立つのは言葉の重要性である。飯野隊員の報告書にも所々に散見され，引いては訓練計画にも阻害を来している。派遣隊員は現地到着前に，十分な自覚と勉強を必要とする。

(b) 教科書，教科課程

教科課程を作成するのに相当苦心をしているようであるが，これを工夫し種種変化する気持は判るが，前述したように，その訓練所，前任者の申し送りによって大半は定まるものである。報告書を読むと，大半は個々に作成することに時間を費やすように伺われる節が多い。

また，訓練に用いるテキストブックは，言葉の不自由に対してその理解度を増長するのに大いに役立つものである。溶接におけるテキストはいかなる国(先進国を含む)においても，共通基礎に基づくものであるので，出来れば，事業団本部において基本テキストを作成して，これをその国々の言葉に訳し基本テキストとすれば，新派遣隊員の悩みも軽減されるのではないかと思われる。

(c) 予算，設備，教材準備，実習に関して

訓練所の予算に関しては，飯野報告にも頁の冒頭から触れられている。たとえば，予算に対しては全くわからないと極言されている。

前述するように前任者の申し送り，あるいは訓練所の歴史記録などからも，大略の見当がつくはずである。特に実習設備，実習材料等も前任者の計画に沿い，不足する部分を毎年補足すれば満足ではないにしろ，毎年毎年と改善するはずである。特に実習材料に対しては，わが国においても満足でないことは十分知っているわけである。この不足分をおぎなうために土地の協力を得る道も，毎年の苦心を積み重ねれば，自然その道は開かれるはずである。

ここで飯野報告による気がかりの点は，合金の実習材料に関する報告であるが，これら実習材料に関する点と実習方法・実習時間の関連に関しては，"あとがき"を参照されたい。

報告書の65頁にある"合金の溶接"の合金は，鉄系統かあるいは非鉄合金かによって教え方に相当の差異があるので，これらを相当取り入れるとすると，実習時間の長短の問題に関係し，飯野隊員の主張している実習時間を短かくする方針に誤りを生じてくる。実習時間を現在何時間で議論しているか不明であるが，出来るだけ長くするのが原則ではないかと思う。

2. 結　言

飯野隊員報告書だけで論ずることは無謀のことであるが，多年にわたる各国に派遣された隊員の報告書を読み，常に感ずることは，今一層系統的に長年月

の計画を尊重して行動すべきではないだろうか，ということである。

3. あとがき

派遣隊員を選抜する筆者の立場として一言この際に申し述べたいことは，毎回応募されて来る人材のかなりのものが，よく未知でしかも言葉の不自由なる国で人に物を教えることが出来るなあと感心している次第であるが，飯野隊員の報告の所々に，教える側にもう少し高度の知識と経験があれば，もっと成果が上がる方法があるのではないかと，読みとれるところがある。

たとえば，実習材料の点でも機材が豊富に入手出来れば，これに越したことはないが，少なければ少なくて工夫が充分出来，溶接技術の向上に役立つ方法があるのではないかと思われる。さすれば，飯野隊員の実習時間の短縮などは解決されるのではないか。

要するに隊員の選考，あるいは技術養成に一段と気をくばる必要があるように思われる。特にわが国内において，溶接技術のロボット化が進めば進む程ど養成方法を検討する必要があると思う。

（協力隊技術専門委員）

農地改良事務所における農協活動

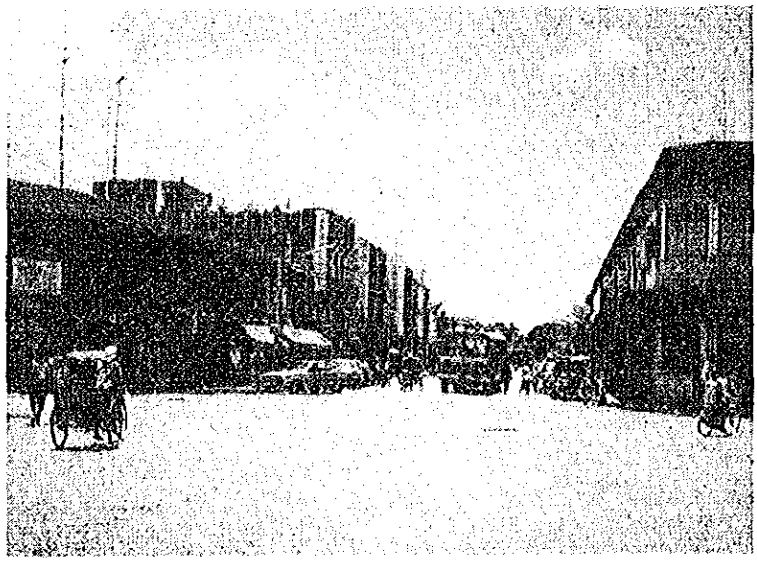
職　種　農業協同組合
氏　名　大黒　登
配属先　チャイナート農地改良事務所

大黒隊員の略歴

生年月日　昭和32年2月25日
出身地　宮崎県
学　歴　佐賀大学卒
派遣期間　57年10月～派遣中

1. 配属先について

私が農業協同組合の隊員として派遣されたDong-theparat農地改革地区は，タイ中央平原の北部，チャイナート県にあり，チャイナート市の南方，直線で約30km（道路で約40km），チャオプラヤ川から20km程離れた所にある。



チャイナートの街

theparat区の中央には，295戸の農家と学校や保健所，駐在所などが集まって545 rais（87.2ha）の集村を形成している。その回りを，3,900 rais（624 ha）の水田が取り巻いている。もと野原であった所を，農地改革プロジェクトによって3年前に切り開き，用水・排水施設も作られた。

3年前に完成した用水路がtheparat区の横を走り，1年目は1回，2年目は2回の隔年放水を行なっており，年平均1.5期作が行なわれている（用水路の流域の半分は1年目に2回，2年目が1回の放水になっている）。

原野開拓，農地配分の後，農地改革事務所のチャンチャイ（アグリカルチュラル・エンジニアリング）の努力によって，水利問題が解決された（水田地域を7区域に分けて，各曜日ごとにローテーションを行ない，村の代表が管理する）。そして私の現在のカウンターパート，ピラポンによって改良が加えられ

た。

Dong-theparatについて，農地改革事務所技術及び計画部外交課の資料「チャイナート県Dong-theparat公有地総合農地改革」（1980年10月）には，次のように書かれている。

「Dong-theparat公有地改革プロジェクト」とは，以下に記す活動全てを含む総合農地改革のことで，すなわち，恒久的に耕地及び居住地を農民に配当することにより，土地所有の問題を改革すること。

道路や水の供給源などインフラストラクチャーの開発，出来る限り他の省庁と統合調整し，農業レベルの開発行政を運営することにある。

Dong-theparatは1954年来（原文のタイ語は1934年），家畜飼育のための公有地として保有されてきた。4,704 rais（754 ha）の土地は雑木林（特に竹林）によって覆われていたが，開墾者（無断借用人）によっておもに水田が開かれた。

農地改革履行の論拠

以下は，Dong-theparat公有地内の侵入地の問題点である。

1. 土地法に関する無断借地人との闘争
2. 地主 ― 小作間の不法行為
3. 肥沃土の欠如
4. 農業普及の欠如

これらの問題を解決するため農地改革事務所（ALRO：Agricultural Land Reform Office）は，Dong-theparat（チャイナート県サンプリ郡）を，1978年10月2日付けの国王発布によって農地改革区と決めた。

目標

「Dong-theparat公有地改革プロジェクト」は，下記の目標に沿って履行される。

1. 農地の土地所有権の改良
2. 農業用水路の建設と農業開発
3. 耕地と永住地の供給
4. 公益，公共サービスの供給
5. 農会の設立や，他の開発団体を促進

（以上，資料より抜粋。尚，詳しくは報告書第2号に載せているので，興味のある方は参照して欲しい。）

2. プロジェクトの問題点

theparat 農地改革プロジェクトは，現在最終段階の「開発事業の調整」期間にあり，チャイナート県農地改革事務所のピラポンが，農協活動育成を中心に活動をしているが，現在の問題点を５つ程挙げてみたい。

1. 農家負債が大きい
2. 農業知識が足りない
3. 道路が悪い
4. 近所付き合いがまだ馴んでいない
5. 労働力が余っている

以上について，次に詳しく述べてみる。

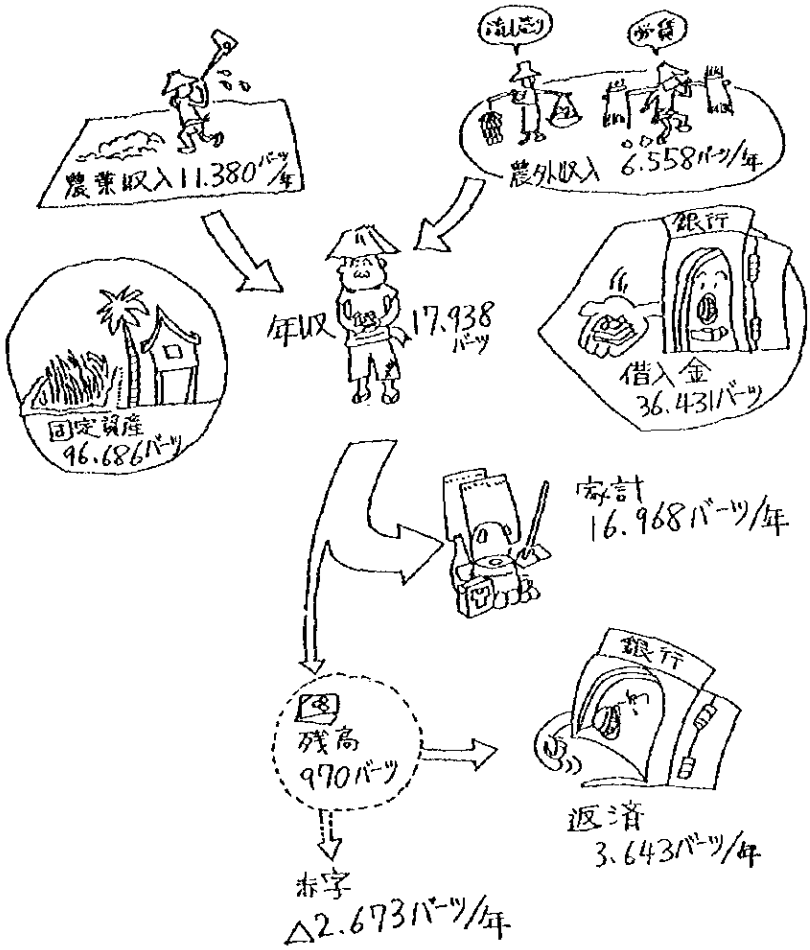
1. 農家負債が大きい

ピラポンが theparat の 106 人について1982年12月に調査したところ，借入金はＢＡＡＣ(Bank of Agriculture and Agricultural Cooperation)からだけでも１人当たり 33,462 バーツ（約33万円）の負債があり，106 人分の総計でＢＡＡＣから 3,446,561 バーツ，他にサンプリ農協から109,500 バーツ（約109万円），商人から281,500バーツ（約281 万円）もあることが分かった。以上の総計を106人で割ると，１人当たり約36,203バーツ（約36 万円）の負債がある。別の銀行からも借りているらしいが，詳しいことは調べられなかった。

中央農協経営報（82年度及び83年度計画）５ページ「theparat 農地改革区経営調査統計」によると，借入金は１人当たり 36,431バーツ（約36万円）となっており，ほぼピラポンの調査と一致する。

農地改革をして土地を配当した後，政府の指導により家の建築に25,000バーツ（約25万円），耕地の整備に１ rai 当たり2,000バーツ（各農家９rais《1.44 ha》の耕地を配当されているので，１農家当たり 18,000バーツ）が低利で借し付けられたが，合計すると 43,000 バーツ（約43万円）にもなる。

ピラポンは，「theparatはタイの農地改革の一つのモデルになっているが，外部からたくさん視察に来ることを見通して，家屋も立派に作らせたのだ……。村の中にはみすぼらしい家が数軒あるが，ここは家屋の建築による借金がない。私はこの方がより良いと考える。商店や修理屋を農業と一緒にやっている家は別だが，生産性の低い家屋に 25,000バーツも借し付けたのは良くないと思う」と言う。


農業収入11.380バーツ/年
農外収入 6.558バーツ/年
年収 17.938バーツ
銀行
借入金
36.431バーツ
固定資産
96.686バーツ
家計
16.968バーツ/年
残高
970バーツ
銀行
返済
3.643バーツ/年
赤字
△2.673バーツ/年

以下，中央農協経営部5ページの資料を和訳し，それと共に図化（前頁参照）してみた。theparat農地改革区経営調査統計 ― 活動調整計画

（ドンコーン区，サンブリ郡，チャイナート県）

1981年水稲生産

収量	1,240 ℓ／rai（約3,875 kg／ha）
経営費	927バーツ／rai（8,343バーツ／9 rais）
粗利益	1,770バーツ／rai（15,930バーツ／9 rais）
籾販売価格	2,857バーツ／2千ℓ
純利益	843バーツ／rai（一期作当たり）
年当たり家計	16,968バーツ
固定資産	96,686バーツ
借入金	36,431バーツ
農外収入	6,558バーツ

2. 農業知識

化学肥料や農薬の使用法を知らない。たとえば，水稲栽培で本田施肥の元肥の場合，ここの農民は複合肥料ではなく単肥（尿素肥料や硫安などの窒素のみを含む肥料）を選ぶと言ってゆずらない。そもそも複合肥料に表示してある，たとえば16－20－0が何を意味するかも知らないで使っている（肥料100％中のN－P－Kの含有率）。

3. 道路が悪い

一応，農地改革で耕地は整然となったが，農道や村道はデコボコの状態。人によっては水田までの距離が3㎞弱もあり，移動，運搬，水田管理にロスが出る。

4. 近所付き合い

theparatの人達は各地から集まった知らない者同士のために，近所付き合いの点でまだ馴じみが薄い。

5. 労働力が余っている

冬期でそれ程暑いわけでもないのに，昼間から25歳くらいの男が数人集まっては，酒を飲んでゴロゴロしている。乾期でもあり，セメントのようになった耕土を耕すのは並みたいていでは出来ないからだろうか。theparatの警察が言っていたのだが，「タイ人はなまけ者が多い上に，祭り事が過ぎていけない。しかも町からはいろいろな宣伝カーがやって来て，連日と言って良いくらいスピーカーで行事の宣伝をして消費意欲をかきたてている」と。

3. 活動計画

タイ中央平原の農家当たり平均耕地面積は，5ha（30 rais）弱であるが，theparatは1.5 ha（9 rais）だけで，平均耕地面積の⅓しかない。農家収入を増やすには，日本式の複合集約経営をするか，農外収入に依存するより外にないと思う。

用水施設をフルに利用して，現在の1.5期作に畑作を取り入れて2.5毛作にする方法。反収を増やす（現在theparatはha当たり3.9 t）方法。家畜飼育を増やす方法。それに，もし出来るならば何か新しい産業を起こすことは出来ないだろうか。

問題点の1．農家負債が大きい，2．農業知識が足りない，この2点の改善について私は以下のように活動計画をたてた。

(1) 堆肥作りの指導……theparatのほとんどの農家が，化学肥料を購入して稲作，畑作を行なっている。化学肥料は使い易いが，長年利用を続ければ土地を痩せさせてしまう危険性さえもっている。そこでまず，農協事務所の裏側に堆肥を作ってデモンストレーションを行ない，次に篤農家を回って堆肥作りを一緒に行なう。

(2) 農業知識の普及……農業事務所に壁新聞を貼る。農家訪問をする等。

(3) モデルファーム1……農協所有の水田4 ha（24 rais）を利用して2.5毛作をしてみる。篤農家に2.5毛作を普及する（2カ所で実現）。

(4) モデルファーム2……事務所の前の野原を耕して畑を作り家畜を自分で飼ってみる。

(5) 肥料，農薬の協同購入をする。

(6) マーケッティングの開発……タイの農産物流通機構について私はまったく知らないので，これからの課題にする。

問題点3，4，5については以下の通りである。

3. 道路が悪い……来年度の農地改革事務所の予算で，道路整備が行なわれる。

4. 近所付き合い……集村型をしているので，遅くないうちに自然解決すると思う。もし積極的に村落社会形成を促せば，タイの伝統社会とは違った新しい形のものが生まれるかもしれない。

5. 労働力が余っている……theparatのデーン（20歳）という青年は，友人と共に毎日7km先のサンブリの町までデコボコ道を，いまにも壊れそうな自転車で通い，土建業者に雇われて働いている。タイ人でもやれば出来るだろ

うが，私にはどうしようもないし，へたに口を出せば嫌われ者になるだろう。新しい産業を起こすと言っても，バナナの加工品を作るとか，織物を作るなど，資本のいらない家内工業的なものが考えられるが，まだそこまで詳しくは調べていない。

チャイナートの市場

4. 活動概要

1. 活動開始

私が任地 Theparat 農地改革地区に移動したのが1月31日で，2月は本格的な活動開始の月となった。当四半期は，仕事の方から私のスケジュールにやって来た。その流れを簡単に述べてみる。

まず稲作計画を作った。水不足問題が起こり，会計係の着服問題と続く中で，私のカウンターパートが転勤してしまう。肥料購入問題が起こり，農民の手で自主的に肥料の共同購入を実現させた。そして定例代議員会，水田雑草問題と続いた。

しかし，交通手段がないということが大きく影響して，私の活動は非常に困難をきたしている。徒歩行動を中心として，緊急時には他人の自転車やバイク

を借りた。体の無理と，他人への迷惑をかける中で，肥料購入問題をクライマックスに，3月31日私は過労で倒れてしまった。

2. 稲作計画

まず私は，農協所有の水田25 rais（4 ha）のために稲作計画をカウンターパートと作った。2月7日から用水路に水が流れ出し，2月下旬には本格的に苗しろ作りが出来るのだ。私達は2月18日から苗作りを始めた。

3. 水利問題

今，乾期なのだが，ここは用水施設があるため稲作が出来る。ところが，今年は強度の乾燥が続いており，チャオプラヤ川（メナム川）の水位も例年になく低いらしい。私の日記をみると，3月6日に61日ぶりの雨が降り，その日から5月3日まで58日間も晴れの日が続いている。そのため水不足問題がtheparat内でも発生し始め，何人もの農民が私の家にやって来て，「水がない，どうする」と言う。

4. カウンターパートの転勤

私のカウンターパート，ピラポンは，3月31日付けで他の県に移ってしまった。実際は3月の下旬からすでに彼の援助はなくなり，私だけの活動になってしまった。

5. 肥料購入問題

theparatの農民は，現金で肥料も買えない。そこで，サンプリ郡農協のパイロート氏の協力で，中央会の肥料を掛け買いさせてもらおうという事になった。ところが，パイロート氏の不手際で，購入が遅れたばかりでなくだめになってしまった。

すでに田植えは終わり，所によっては20～30cmに伸びた水稲も黄化し始め，組合員は次から次に私の所にやって来て，「まだ来ないのか」と訪ねる状況だった。

私は緊急会議を開くため，村の内外と走り回り，「肥料を共同購入する会」を作り，サンプリの町の商店とかけ合って，89袋，4,450kgの化学肥料を掛け買いした。

私は連日の過労で，チャイナートの病院に担ぎ込まれてしまった。何よりも私を困らせたのは，“交通手段が徒歩”ということだった。

6. 交通手段

緊急時には近所の人の自転車やバイクを借りに行く。どの車も10年以上は使っているはずだ。ほとんどの自転車はブレーキが壊れているので，止まる時はタイヤを足で押えてブレーキ代わりにする。バイクは，スピードメーターなど

何年も昔に壊れてしまった物が，骨董品のようにくっついている。方向指示器は点灯しないのが普通で，前ブレーキのきかない物にもよく乗る。

6km先にあるサンブリの町へ行く場合は，ソンテオや耕耘機に乗せてもらって行く。ソンテオは乗客が多すぎて，天井の上に登っている人もいる。登下校時には天井の上でさえ場所がなく，天井の上で立っている学生が必ず数人いる。

サンブリの町の停車場には，4，5人の，バイクにまたがったおじさんがたむろしている。ソンテオに乗りそこなった人をつかまえて，目的地まで運んでくれる。土，日や祝日や学校休み期間は，午後2時半を過ぎるとtheparatの前を通過するソンテオはなくなってしまうので，どうしてもこのバイクを使わざるを得ない。サンブリ ― theparat 間20バーツ（約200円）だ。

7. 定例代議員会

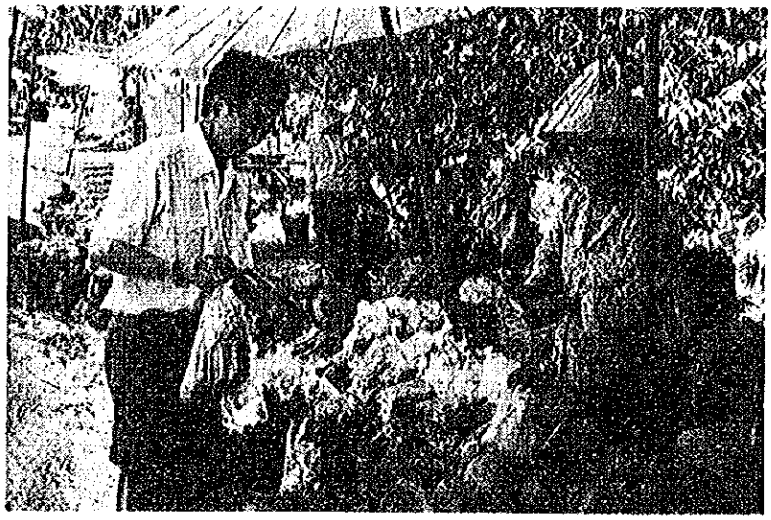
毎月10日は，当農協の代議員会になっている。4月8日，私のつたないタイ語で会は進められた（10日が日曜なので繰り上げ）。

8. 水田雑草問題

4月下旬，水不足のため水田が干上がり，至る所で雑草繁茂。日本では見たこともない風景が広がっている。まるで雑草を植えているようだ。

9. 食料入手と交通手段

飲料水は，近くの井戸からバケツに汲んで運んでくる。水浴びもその井戸ま



露店で買物をする筆者

で行ってする。食料購入は，村の中の雑貨屋まで片道1,520 mを歩いて行くか，自転車を借りて行く。店の肉は紐でぶらさげてある。店の人は蟻や蠅が群がっている肉を，匂手でたたいて追い払った後，切り取って売る。もしくは6 km先にあるサンプリの町までソンテオに乗って行くが，ソンテオ自体いつ来るか決まっていない。

日陰のない橋の側で，2時間近くソンテオを待つ農民の姿がしばしば見られる。私は，通りがかりの耕耘機に乗せてもらったりして行く。何も来ない時は歩いて行く。途中で何かに出合うので6 kmを歩き通したことはないが，サンプリの町の外れにある農業普及所やサンプリ郡農協に行く時は，町に着いた後も数キロの道を歩かざるを得ない。

10. 前の畑

家の前の畑をFORDのトラクターで耕してもらったが，強度の粘土質土壌で鍬でも砕くことが出来ない。雨も降らない私の家の井戸水は塩類を含んでいて，植物に与えると枯れてしまう。

11. 家の使用人

1月31日，私がtheparat村に移って来た時，カウンターパートのピラポンが，村の中の男を1人家の使用人として連れて来た。使用人の名前はプラシット，あだ名はゲー。18歳の男だが4年しか義務教育を受けておらず，私よりタイ語を読めないので，教科書を買って与えているが，あまり勉強しない。

彼の仕事は家の番だ。カウンターパートは，「ここtheparatは泥棒が多いので，絶対家の番が必要だ」と言う。「身の安全も保証出来ないので，おまえのステレオラジカセも売った方が良い」と言われ，涙を飲んで売ってしまった。

食事はゲーも一緒に食べるので，交替で作る（食費は私持ち）。毎朝の掃除は2人で分けてやり，洗濯は自分の物を自分でやっている。

彼の給料は500バーツ（約5,000円）でほぼ普通。食事が付いているので普通以上だと人は言う。

5. 活動計画

1. 稲作計画

私は，『イネつくりの基礎』（農文協編），『作物（甲）』（川田信一郎・村田吉男，農文協），『タイの米』（国際農林業協力協会）等を参考に，カウンターパートと稲作計画を作った。

農薬など買う必要のない健康な稲を作ることによって，収量を上げることを

考えた。できれば肥料を購入せずにすむ方法を考えたが，それだけの自給肥料（堆肥）を作ることは，量的にも時間的にも不可能だった。そこで，複合肥料（N－P－Kは16－20－0）と尿素（46－0－0，カウンターパートの提案）を使用することにした。

タイでは除草剤の侵入によって，直播をするところもかなり増えている。しかし，労働力の余っているはずの国で直播栽培をするというのは，合理的ではないと思う。確かに，労働力不足で直播に頼らざるを得ない農家はある。だんなに逃げられ家族の者もそれぞれ別の仕事があるので，女手ひとつで稲作をやらざるを得ない人や，田植えの手間賃さえも払えないので，安い除草剤で済ましざるを得ない人などだ。

ところが，水田地区を回って見ると，頑丈そうな男が，「田植えは腰が痛くなるから嫌やだ」と言って，除草剤を播いている風景に出合う。気が抜けてしまう。私は田植え方式を選んだ。

施肥量を抑え，背は小さいが健苗に育てた。近所の苗床でいもち病が発生したので見に行った。尿素肥料をたっぷり播いて，大きい苗にしようと思ったのが災いし，弱々しい苗にいもちが付いてしまったのだ（苗いもち）。総施肥量に相当する窒素を苗床に播いたらしい。

タイでは一般に苗は60～70cmに伸びたものを，移植の時に葉先を切って捨て，40～50cm程にしたものを植える。この方法は，移植後根が活着するまでの葉の蒸散を抑える目的があるらしいが，苗にとっては良くない。それだけ生育期間にロスが起こる。私は，40cm程になった苗を切らずに植えさせた。なかなか健康に育ってくれた。

私は，施肥を4回に分けて行なうことにした。暖地では肥料の分解が速いので，一度に施肥すれば，稲に吸収されずに流亡してしまうものや，空気中に逃げてしまうと考えたからだ。そして生育後期の施肥に重点を置くことにした。

しかし今年は旱魃のために，計画から随分外れた作業になった。水が田に入ってこないため耕起が出来ず（耕地はセメントのようになっているので，水を入れない限り，耕起は走行式トラクターでは不可能），10日遅れて本田の耕起と施肥を行なった。

25rais（4ha）を3人の代議員で分けて管理することにしたが，1人だけがどうにか私の計画通りに進んでいる。後の2人は，水不足などで随分遅れてしまった。うち1人は，田植えが10日程遅れただけでなく，指示しないのに農薬を播いたりすることがあった。

4月になっても，水不足のため雑草が繁茂しはじめる。「草取り」を指示したが，とても彼らだけでは手が足りない。彼らは朝の涼しいうちに，1時間程田に入って除草をするだけで，あまり精を込めてやることはない。

2. 定例代議員会の様子

theparat 農協の代議員は現在8名。以前は11名いたが,サウジアラビアに出稼ぎに行った人が2人，一身上の都合で1人が抜けて8名になった。新しい代議員を探しているが，なかなか良い人が見つからず半年以上も過ぎている。

それと対照的に，会議に出席する公務員の数の方が多い場合があるのには驚いた。まず農地改革事務所のサマー所長に，カウンターパートのピラポン（現在はいない），そして私。サンブリ郡農協から協力という形で，パイロート組合長ともう1人職員がお供をしてくる。毎月参加するのではないが，中央部農業局のセーリー氏，種子センターのプラモート氏，普及所のウィティヤー氏等がそろう。

私が theparat の村で生活するようになるまで，会議はサンブリ郡農協の会議室を借りて行なわれていた。theparat の代議員は，サンブリの町まで自転車やバイクで毎月出て来ていたのだ。私は，theparatで会議を開くことを提案した。2月から，私の家で床に座って会議を開いている。会議出席代も払わない事に決まった。

代議員も，自分達でメモを取っている。代議員達は積極的でよい。しかし各人問題がある。

プンロートは着服問題を起こした。サムロワイはとても口が達者だが，ほとんど活動に参加しない。ソムサックは1番若くて，彼の農家経営もモデル経営と称される程だが，自己中心的で協同活動の名からはずれている。

ルンヤットは人が良くて働き者だが，還暦をとうの昔に迎えた年寄りだ。ブーヤイコイとプンタンとラックの3人は theparat 村の外の村に居て，代議員会の時以外は交流がない。サムリーは50歳代の男だが，もっとも積極的に活動をしている。しかし，彼は一度私をだまして着服を図ろうとした。実は，彼は大きな借金を背負っている。

3. 「肥料の共同購入をする会」のいきさつ（日記から）

3/28（月） 朝，プンロート代議員がやって来て，「肥料はいつ来るのか」と尋ねる。「すでに田植えをして，稲は30cmに伸びた所もある。肥料切れで黄化した所もたくさんある。早くしないと組合員は農協を信用しなくなり，自分で掛け買いに行くだろう」と言う。

バイクでも借りて，自分でサンプリ郡農協に行き聞かねばと思っている所に，コービンがバイクでやって来て，「肥料の件はだめになった」と連絡する。バイロート氏がクルンテープに行って，中央会の会員になる手続きをして，肥料を13トン（複合肥料16－20－0）購入するという計画だったが，1年以上の組合員で月々出資金を出した所でないと，肥料の購入は不可能ということが今日分かったらしい。それにしても，数カ月前から頼んでいた件が今頃分かるとは，なんという対応の遅さだ。

私は各代議員やカウンターパートに連絡するため，バイクを借りに昼12時，パソンさん宅に出かける。パソンさんは出かけていない。1時間半待っていた。さっそくバイクを借りて代議宅を回り，メモを置いてくる。メモ内容，「肥料購入はだめになった。明日夕方，緊急会議を開くので集合して下さい」。

次にサンプリ郡農協に行き，肥料購入者名簿をもらう。精米所に行き電話を借りて（20バーツ），農地改革事務所のカウンターパートに連絡。

3/29（火）　農地改革事務所の車で，カウンターパートのピラポンがやって来る。サンプリに行き，肥料を売ってもらえる店を捜す。50kgの袋1袋当たり，250バーツが相場だ。今夜の緊急会議で，この話をすることにしよう。

ところが，今夜ピラポンの送別会をtheparatの私の家でやろうと，職場の連中が決めたらしい。私は何となく，緊急会議がお流れになる気配を感じた。祭りの好きなタイ人のことだから，十分に有り得る。

4時，ブーヤイブリウ，ブンタン，ラックの代理がやって来て，「もう共同購入はしない」と言う。残念だ。

夕方，職場の連中も集まり，準備で賑やかになる。代議員達はすでに肥料の話は受けつけずに，食事の準備に精を出している。とうとうドンチャンさわぎの夜になった。もちろん，私もさわいで笑いころげた。

3/30（水）　朝，歓迎会の跡片付け。酒気は残っていないが，連日の疲れで体が重い。代議員宅を回って，個人ごとに話を聞く。会えなかった代議員もいる。

ピーリー代議員宅に行き，「やる気はないのか」と聞く。私は，「やりたいなら，農地改革事務所やサンプリ郡農協の加勢なんかなくても，自分で出来るじゃないか」と言う。ピーリーも買いたくて仕様がない。今日の夕方もう一度組合員宅を回って，事情の変化と自主活動による共同購入への参加を呼びかけようということで，話は決まった。

午後4時，ピラポンはここを去る。夕方6時過ぎ，約束通りピーリーがサムロリイという近所の人を連れて来る。今から村の中を歩いて回るのだ。「サン

プリ郡農協のは1袋245バーツだったが，10バーツ高い255バーツでも共同購入するのか」と，尋ねて回る。

どの家も肥料が来るのを首を長くして待っているが，肥料を購入するだけの資金は到底持ち合わせていない農民なので，もし自分で買うとなると，掛け買いで300バーツ，安くても260バーツにはなるという。ほとんどの人が共同購入に参加継続を希望したが，他の代議員に所属する農家までは，とても網羅することは出来なかった。

全員で26名。89袋が結集出来た。本物の共同購入と根本的に違う点は，「掛け買い」という点だ。しかし，これだけでも共同の精神は発生したと私は考える。この点に関して，私は満足する。次回はもっと安く，多勢で，しかも現金買いは出来ないものだろうかと考える。

暗くなって，私達3人は農家回りから帰って来た。涼しい時間なので，歩き回った疲れも感じない。夜，私は，「肥料の共同購入をする会」の趣旨文を，辞書を見ながら作り，26名の名簿作りもする。

3/31（木）　今日は，農地改革事務所の車がtheparatに来ることが出来ない。今日の行動も難儀なことになる。

朝7時20分，ピーリーがサムロリイと，青いバイクを押してやって来る。今から，サンプリの肥料を売ってくれる商店に行って商談をするのだ。青いバイクはカギもいらない。キックスターターだけで走り出すが，私は何べんやってもエンジンを起こすことが出来ない。とうとうバイクの持ち主ブーヤイコイに運転してもらい，サンプリに行くことにした。3人バイクにまたがって行く。こんなボロバイクが，生き返ったようによく走る。

29日の商談通り，1袋当たり250バーツに運送代5バーツを加算することで話がついたが，商店の女主人は小柄な体で次のように言った。

「信用出来ない。日本人はすでに金持ちになっているので，掛け売り出来るかもしれないが，タイ人は嘘つきが多い。特にtheparatは貧乏人ばかりだから，もし金が集まらない時はどうする」。

私はすましたふりをして，「心配はいらない。全員集金してみせる」と言う。パスポートを見せても彼女は信用せず，「どうせ問題が起きたら日本に逃げるのだろう」と言う。とんでもない。

私達が担保になるような物を何も持っていない事を知ると，女主人はますます硬化していったが，ブーヤイコイも，「問題はない。8月1日には全額きちんと返せる」と，落ち着いて言う。書類にサインをして，一応話はついた。

肥料倉庫に行き，トラックに積むのを監視して，一緒に theparat に乗って行く。家の下の吹き抜きに肥料を降ろすのを手伝い，2回目のトラックがやって来るまで雑用を済ませるが，急に体が重くなる。ビーリーは各農家を回って，肥料が来た事を知らせて回り，ブーヤイコイは肥料借用書を26人分書き上げる。私は布団を敷いて横になるが，普通ではない。

午前10時頃，熱38.2℃。総合感冒薬とビタミン剤を飲む。喉の痛み，咳，たん等はまったく出ない。でん部の筋肉が疲労感を帯びてくる。12時を回った。両足も疲労感を感じる。おかゆをむりやり食べて，意味がないのに抗性物質を1錠飲む。毛布をかぶるが，悪寒で汗も出ない。頭痛がひどく寝つけないばかりか，下では肥料の分配で農民がごった返したり，耕耘機のけたたましい音が何べんも行き来する。

体全体に重圧を感じて動けなく，変な夢みたいなものが頭の中をぐるぐる回る。4時を回っても保健所の保健婦は町から戻って来ないので，チャイナート病院に行くことを決める。

theparat に1台あるパトムの車に乗せてもらいチャイナートへ行く。このパトムという人物，車を運転しながら私に尋ねるには，「何！金を持って来ていないだと。ふざけるな。ガソリン代をどうしてくれる」。チャイナートに着くまでぶつぶつ言っていた。

ガソリン代は50バーツだったが，私が往復して theparat に戻った時，250バーツ請求された。お金を渡した時の彼の顔は，こぼれんばかりに歯を見せていた。今彼は，私を見つけるとこのように話している。「のぼるは『たったの250バーツでいいのですか』と私に言ったんだよ。いいやつだよ，のぼるは」。私は，そんな事を言った覚えは一つもない。

病院で看護婦は言った。「マラリアかもしれないわ」。実に気楽な語調だったが，私は仰天した。毎日MP錠を飲んでいるので，そんなはずはない。

4日後にどうにか体が楽になったので，theparat に戻った。

あ　と　が　き

青年海外協力隊員の報告書集を昭和54年度に発刊して以来，今年で5年目を迎えました。これまで，24ヶ国の報告書集を刊行し，多くの帰国隊員の皆様方から，現地の体験に基づく，貴重な生の声を寄せていただきました。一昨年度からの試みとして，今回のタイ編におきましても，冒頭に現地事情を説明する報告書を置き，以下に，業務報告書を配置して，当国理解の助けとなるよう編集しました。今回，タイ編においては，帰国隊員が少ないため，一部，現在活動中の隊員の皆様に，執筆をお願いしました。報告書集も，数をおうごとに，内容も充実さを増してきており，各界の多くの皆様方の，協力隊を知る上での貴重な参考資料となってきております。

今後共，ご活用下さる皆様方からの，忌憚のないご意見，ご提言をいただき，一層の充実をはかりたいと思っています。

末筆ながら，この報告書集のために，ご多忙中にもかかわらず，積極的にご協力をいただき，報告書に対する適切なコメントをご執筆下さった，技術専門委員の先生方ならびに，報告書の収録を快諾され，追記の原稿を寄せられた，帰国隊員の皆様に厚くお礼申しあげます。

なお，本報告集のご活用にあたり，他への転載等を企画される場合は，青年海外協力隊事務局（啓発課）に，必ず，ご相談下さるよう，お願い申し上げます。

昭和59年10月

青年海外協力隊事務局　啓発課

海外協力の現場から ── 青年海外協力隊員の記録〈タイ編〉

昭和59年10月発行
編　者　国際協力事業団青年海外協力隊事務局
発行所　国際協力事業団青年海外協力隊事務局
〒150　東京都渋谷区神宮前 4-11-7
電　話　(03) 400-7261(代)
印刷所　㈱国際文化通信社

〔非売品〕